



インストール・ガイド



インストール・ガイド

— お願い —

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、89 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Rational Performance Tester (部品番号 5724-J96) バージョン 7.0.2、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

© Copyright International Business Machines Corporation 2000, 2008. All rights reserved.

目次

概説	1
IBM Installation Manager	1
IBM Rational Software Delivery Platform	1
インストール要件	3
ハードウェア要件	3
ソフトウェア要件	4
ユーザー特権についての要件	7
インストール計画	9
インストール・シナリオ	9
インストールするフィーチャーの決定	10
アップグレードおよび共存についての考慮事項	11
IBM Rational Performance Tester v6.1.x からのアップグレード	11
製品の共存についての考慮事項	12
インストール・リポジトリ	13
Installation Manager のリポジトリ設定	13
パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリー	14
既存の Eclipse IDE の拡張	15
プリインストール・タスク	17
インストール作業	19
Rational Performance Tester の CD-ROM からのインストール: タスクの概要	19
ワークステーション上の電子イメージからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要	20
電子イメージからのインストール	20
共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要	20
HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要	21
HTTP Web サーバー上への Rational Performance Tester の配置: タスクの概要	22
IBM Installation Manager の管理	23
Windows への Installation Manager のインストール	23
Linux への Installation Manager のインストール	23
Windows での Installation Manager の開始	24
Linux での Installation Manager の開始	24
Windows での Installation Manager のアンインストール	24
Linux での Installation Manager のアンインストール	25
Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール	25
Installation Manager のサイレント・インストール	25

Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール	25
ほかのプラットフォームでの Installation Manager のサイレント・アンインストール	26
電子イメージの確認および解凍	27
ダウンロードしたファイルの解凍	27
ランチパッド・プログラムからのインストール	29
ランチパッド・プログラムの開始	29
ランチパッド・プログラムからのインストールの開始	30
Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール	31
サイレント・インストール	37
Installation Manager を使用した応答ファイルの作成	37
データ収集インフラストラクチャー応答ファイルの作成	38
Installation Manager インストーラーを使用した応答ファイルの記録	39
サイレント・モードでの Installation Manager のインストールと実行	39
すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール	41
現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール	42
応答ファイルのコマンド	42
サイレント・インストール設定コマンド	42
サイレント・インストール・コマンド	45
参照: サンプル応答ファイル	50
サイレント・インストール・ログ・ファイル	51
ワークステーション用の開発シート・ライセンスの管理	53
ライセンス	54
インストール済みパッケージに関するライセンス情報の表示	55
ライセンスの購入	55
ライセンスの使用可能化	56
プロダクト・アクティベーション・キットのインストール	56
フローティング・ライセンスの使用可能化	57
プロトコル・キーおよび仮想テスター・ライセンス・キー・パックの管理	59

Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす	61	サポートされるプラットフォーム	76
Rational Performance Tester の更新	63	サポートされる JVM	76
インストールの変更	65	インストール・ファイルの探索	76
前のバージョンへの更新の復帰	67	AIX ワークステーションへの Agent Controller のインストール	76
Rational Performance Tester のアンインストール	69	z/OS (OS/390) への Agent Controller のインストール	82
IBM Packaging Utility	71	Agent Controller セキュリティー機能の使用	83
Packaging Utility のインストール	71	ワークベンチおよび Agent Controller 間の互換性についての要約	84
Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー	72	既知の問題と制限事項	84
オプション・ソフトウェアのインストール	75	ClearCase LT のインストール	85
Agent Controller のインストール	75	ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報の探索	85
ハードウェア前提条件	76	Rational ClearCase LT のインストールの開始	86
		Rational ClearCase LT ライセンスの構成	87
		特記事項	89
		商標	90

概説

このインストール・ガイドには、IBM® Rational® Performance Tester のインストール、更新、およびアンインストール方法が記載されています。

このインストール・ガイド の最新版は、 http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rpt/70/docs/install_instruction/install.html でオンラインで入手可能です。

このインストール・ガイドの HTML 版は、最初の製品 CD のドキュメンテーション・ディレクトリーで入手可能です。

注: 文書の更新内容やトラブルシューティングの情報については、
<http://www.ibm.com/software/rational/support/documentation/> を参照してください。

IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、コンピューターに Rational Performance Tester 製品パッケージをインストールするプログラムです。インストールしたすべてのパッケージの更新、変更、およびアンインストールも行います。パッケージとは、具体的に Installation Manager でインストールできるように設計された製品、コンポーネントのグループ、または単一のコンポーネントです。

IBM Installation Manager は、次のタスクを短時間で実行できる便利なフィーチャーを提供します。

- 製品パッケージのインストール
- インストール済み製品パッケージのライセンス管理
- インストール済み製品パッケージの更新の検索およびインストール
- インストール済み製品パッケージの変更
- インストール済み製品パッケージの前のバージョンへの復帰
- 製品パッケージのアンインストール

IBM Installation Manager について詳しくは、Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp>) を参照してください。

IBM Rational Software Delivery Platform

IBM Rational Software Delivery Platform は、複数の製品を共用する開発ワークベンチとその他のソフトウェア・コンポーネントを含む共通開発環境です。

このデリバリー・プラットフォームには、以下が含まれています。

- Rational Application Developer
- Rational Functional Tester
- Rational Performance Tester

- Rational Software Architect
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer
- Rational Tester for SOA Quality

Rational Manual Tester も使用可能ですが、このプラットフォームに含まれていません。Manual Tester は、Rational Functional Tester に組み込まれています。あるいは個別に購入することが可能です。

Rational Performance Tester について

IBM Rational Performance Tester は、システム・パフォーマンスをテストするツールです。Performance Tester は、Web アプリケーションのテストをサポートし、操作性およびスケーラビリティを大幅に向上させます。これは、Java ベースの実行エンジンを使用して、Eclipse 統合開発環境でホストされます。

この製品には 2 つのコンポーネントがあります。デスクトップ上にインストールされ、組み込み IBM Rational Agent Controller を含む Performance Tester と、データ収集インフラストラクチャーを備えた IBM Rational Agent Controller の外部バージョンの 2 つです。どちらのバージョンの Agent Controller でも、追加のコンピューターを使用してテスト・ロードが生成されます。Agent Controller は、リモート・コンピューター上の仮想ユーザーをエミュレートするドライバーを実行します。仮想ユーザーは、ロード・テストのインスタンスまたは反復です。ランチパッドから「**Install IBM Rational Performance Tester (Agent を含む) のインストール**」オプションを選択すると、組み込み Agent Controller がインストールされます。ランチパッドから「**IBM Rational Performance Tester Agent のインストール**」オプションを選択すると、外部 IBM Rational Agent Controller をデータ収集インフラストラクチャーと共に、Windows® および Linux® オペレーティング・システム上に別個にインストールすることができます。

Performance Optimization Toolkit の機能は、前の製品リリースではオプションのコンポーネントでしたが、バージョン 7 では Performance Tester コア製品に統合されています。この新機能は、ご使用のアプリケーションのパフォーマンスの問題の検出および修復に役立つパフォーマンス分析ツールを提供します。パフォーマンス・テストおよびスケジュールを作成し、分散アプリケーションのさまざまな部分からパフォーマンス・プロファイル・データを生成できます。分析ツールはテストまたはスケジュールの実行時にこのデータを収集し、データを相互に関連付けて、グラフィカルなレポートを表示します。

インストール要件

このセクションでは、ソフトウェアを正常にインストールし、実行するために満たす必要がある、ハードウェア、ソフトウェア、およびユーザー特権の要件について説明します。

最新の詳細なシステム要件については、 www.ibm.com/software/awdtools/tester/performance/sysreq/index.html を参照してください。

ハードウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムが最小ハードウェア要件を満たしていることを確認してください。

ハードウェア	要件
プロセッサ	最小: 1.5 GHz Intel® Pentium® 4 (最適な結果を得るためにはそれ以上)
メモリー	Rational Performance Tester 用の最小: 768 MB RAM (Agent Controller のみの場合の最小: 500 MB RAM)
ディスク・スペース	<p>製品パッケージのインストール用として、最小で 1.5 GB のディスク・スペースが必要です。開発するリソース用に追加ディスク・スペースが必要です。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none">• ディスク・スペース要件は、インストールするフィーチャーによって増減する場合があります。• この製品をインストールするための製品パッケージをダウンロードする場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。• Windows 用: NTFS の代わりに FAT32 を使用する場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。• Windows 用: ご使用の環境変数 TEMP で指定されているディレクトリーに、追加で 500 MB のディスク・スペースが必要となります。• Linux 用: /tmp ディレクトリーに、追加で 500 MB のディスク・スペースが必要となります。

ハードウェア	要件
ディスプレイ	最低でも 256 色を使用する 1024 x 768 の解像度 (最適な結果を得るためにはそれ以上) Agent Controller のみの場合: 最低でも 256 色を使用する 800 x 600 のディスプレイ (最適な結果を得るためにはそれ以上)
その他のハードウェア	Microsoft® マウスまたは互換のポインティング・デバイス

ソフトウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムがソフトウェア要件を満たしていることを確認してください。

オペレーティング・システム

この製品では 32 ビット・モードで、次のオペレーティング・システムがサポートされています。

表 1. Rational Performance Tester 7.0.x でサポートされるオペレーティング・システム

オペレーティング・システム	Rational Performance Tester	Performance Test Agent	Performance Test Agent (DCI を伴う)
AIX® 5.2 TL7 以降	いいえ	はい	いいえ
AIX 5.3 TL3 以降	いいえ	はい	いいえ
RedHat Desktop パーバージョン 4.0 アップデート 1 から 5 (32 ビット・モードで稼働)	はい	はい	はい
RedHat Enterprise パーバージョン 4.0 アップデート 1 から 2 (32 ビット・モードで稼働)	はい	はい	はい
SuSE Linux Enterprise Server パーバージョン 9.0 SP1 から SP4	はい	はい	はい
SuSE Linux Enterprise Desktop/Enterprise Server パーバージョン 10.0	はい	はい	はい
Microsoft Windows 2000 Advanced Server (Service Pack 3 または 4)	いいえ	はい	はい

表 1. Rational Performance Tester 7.0.x でサポートされるオペレーティング・システム (続き)

オペレーティング・システム	Rational Performance Tester	Performance Test Agent	Performance Test Agent (DCI を伴う)
Microsoft Windows 2000 Professional (Service Pack 3 または 4)	はい	はい	はい
Microsoft Windows Server 2003 Enterprise/Standard Edition (Service Pack 1)	はい	はい	はい
Microsoft Windows XP (Service Pack 1 または 2)	はい	はい	はい
Microsoft Windows Vista	はい	はい	はい
z/OS® 1.4、 1.5、 1.6、 1.7 System Z	いいえ	はい	いいえ

注: Rational Performance Tester は、 64 ビット・プロセッサ上で稼働する

Microsoft Windows オペレーティング・システムではサポートされません。

リストされているオペレーティング・システムでは、Rational Performance Tester でサポートされるすべての言語がサポートされます。

注: Citrix Presentation Server のクライアントは、Linux 上で使用可能ですが、

Rational Performance Tester は Linux 上で Citrix 拡張をサポートしません。

既存の Eclipse IDE を拡張するためのソフトウェア要件

既存の Eclipse IDE を拡張するためには、次の Java™ 開発キットのいずれかに含まれる JRE も必要です。

- Windows 用: IBM 32-bit SDK for Windows Java 2 Technology Edition バージョン 5.0 サービス・リリース 5、 Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 12 for Microsoft Windows
- Linux 用: IBM 32-bit SDK for Linux on Intel architecture Java 2 Technology Edition バージョン 5.0 サービス・リリース 5、 Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 12 for Linux x86 (SUSE Linux Enterprise Server [SLES] バージョン 9 ではサポートされません)

注:

- Sun Java 2 Standard Edition (Java SE) ランタイム環境 (JRE) 6.0 はサポートされません。
- Rational Performance Tester への更新をインストールするために、Eclipse のバージョンの更新が必要になる場合があります。前提条件となる Eclipse バージョンの変更についての詳細は、更新のリリース資料を参照してください。

重要: Windows Vista システムで、管理者特権を持たないユーザーが Rational Performance Tester を操作できるようにするには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内に Eclipse をインストールしないでください。

サポートされる仮想化ソフトウェア

次の仮想化ソフトウェアがサポートされます。

- Citrix Presentation Manager バージョン 4 (Windows Server 2003 Standard Edition または Windows Server 2003 Professional Edition 上で稼働)

追加のソフトウェア要件

- Linux 用: GNU Image Manipulation Program Toolkit (GTK+) バージョン 2.2.1 以降および関連ライブラリー (GLib、Pango)。
- 以下の Web ブラウザーのいずれか (README ファイルと「インストール・ガイド」を表示し、Standard Widget Toolkit (SWT) ブラウザー・ウィジェットをサポートするため)
 - Windows 用: Microsoft Internet Explorer 6.0 (Service Pack 1 以降)
 - Mozilla 1.6 以降
 - Firefox 1.0.x、1.5、および 2.0 以降

注:

- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0 では、環境変数 MOZILLA_FIVE_HOME を、Firefox または Mozilla がインストールされているフォルダーに設定する必要があります。例えば、setenv MOZILLA_FIVE_HOME /usr/lib/firefox-1.5 とします。
- SWT ブラウザー・ウィジェットをサポートするには、Firefox ブラウザーがリンク可能な Gecko ライブラリーにコンパイルされている必要があります。mozilla.org からダウンロードする Firefox は現在この基準を満たしていませんが、主要な Linux ディストリビューションに含まれている Firefox インストールでは多くの場合に基準が満たされています。

注: ランチパッドでは Mozilla 1.6 がサポートされていません。ご使用のブラウザーが Mozilla の場合にランチパッドを実行するには、バージョン 1.7 以降が必要です。

- ツアー、チュートリアル、およびデモンストレーション・ビューレットなどのマルチメディア・ユーザー支援を正しく表示するには、Adobe® Flash Player をインストールする必要があります。
 - Windows 用: バージョン 6.0 リリース 65 以降
 - Linux 用: バージョン 6.0 リリース 69 以降
- サポートされるデータベース・サーバー、Web アプリケーション・サーバー、およびその他のソフトウェア製品については、オンライン・ヘルプを参照してください。

ユーザー特権についての要件

Rational Performance Tester をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID が必要です。

- ユーザー ID には 2 バイト文字が含まれていてはなりません。
- Linux 用: root としてログインできなければなりません。

インストール計画

どの製品フィーチャーをインストールまたは更新する場合にも、事前にこのセクションのすべてのトピックをご一読ください。効果的なプランニングと、インストール・プロセスの主要な段階を理解することが、インストールの成功につながります。

インストール・シナリオ

Rational Performance Tester をインストールまたは更新する際に使用できるシナリオは多数あります。

以下に、インストール・シナリオを決定するであろう要素をいくつか挙げます。

- インストール・ファイルにアクセスするときに使用する形式および方式 (例えば、CD にアクセスする、IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードしたファイルにアクセスするなど)。
- インストールのロケーション (例えば、ご使用のワークステーション上に製品をインストールしたり、インストール・ファイルをお客様の社内で使用可能にしたりすることが可能です)。
- インストールのタイプ (例えば、Installation Manager の GUI を使用することも、サイレント・インストールを行うことも可能です)。

典型的なインストール・シナリオには、以下のものがあります。

- CD からのインストール
- ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール
- HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール

後の 3 つのシナリオでは、Rational Performance Tester をインストールするためにサイレント・モードで Installation Manager プログラムを実行することを選択できます。Installation Manager のサイレント・モードでの実行については、37 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

基本製品パッケージのインストールと同時に、更新をインストールできることにも注意してください。

CD からのインストール

このインストール・シナリオでは、お客様は製品パッケージのファイルが含まれている CD を所有しており、通常は、ご自身のワークステーション上に Rational Performance Tester をインストールします。このステップの概要については、19 ページの『Rational Performance Tester の CD-ROM からのインストール: タスクの概要』を参照してください。

ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードしており、ご自身のワークステーション上に Rational Performance Tester をインストールします。このステップの概要については、20 ページの『ワークステーション上の電子イメージからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要』を参照してください。

共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Performance Tester のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。このステップの概要については、20 ページの『共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要』を参照してください。

HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール

このシナリオは、ネットワーク上の製品を最も短い時間でインストールする方式で、共用ドライブを使用したインストールとは異なります。HTTP または HTTPS Web サーバー上に Rational Performance Tester の製品パッケージ・ファイルを置くには、IBM Packaging Utility というユーティリティ・アプリケーションを使用して、HTTP または HTTPS Web サーバーから直接 Rational Performance Tester をインストールする場合に使用できるパッケージ・フォーマットにインストール・ファイルをコピーする必要があります。このユーティリティは、Rational Performance Tester に付属しています。パッケージが格納されている HTTP または HTTPS Web サーバー上のディレクトリは、リポジトリと呼ばれます。Rational Performance Tester インストール CD に含まれているオプション・ソフトウェアはこのパッケージには入りません。このパッケージに入るのは、Rational Performance Tester インストール・ファイルだけです。このステップの概要については、21 ページの『HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要』および 22 ページの『HTTP Web サーバー上への Rational Performance Tester の配置: タスクの概要』を参照してください。

インストールするフィーチャーの決定

インストールする Rational Performance Tester のフィーチャーを選択することにより、ソフトウェア製品をカスタマイズできます。

IBM Installation Manager を使用して Rational Performance Tester の製品パッケージをインストールする場合は、使用可能な製品パッケージに入っているフィーチャーがインストール・ウィザードに表示されます。このフィーチャー・リストから、インストールするフィーチャーを選択できます。デフォルトの一連のフィーチャーが選択されています (必須フィーチャーはすべて含まれています)。フィーチャー間に依存関係があれば、Installation Manager は自動的にそれを強制し、必要なフィーチャーが消去されないようにします。

注: パッケージのインストールを完了した後も、Installation Manager で「パッケージの変更」ウィザードを実行して、ソフトウェア製品のフィーチャーを追加または除去することができます。詳しくは、65 ページの『インストールの変更』を参照してください。

アップグレードおよび共存についての考慮事項

旧バージョンの製品がある場合、または同じワークステーション上に複数の Rational Software Delivery Platform 製品をインストールする計画がある場合は、このセクションの情報を確認してください。

IBM Rational Performance Tester v6.1.x からのアップグレード

IBM Rational Performance Tester v6.1.x または IBM Performance Optimization Toolkit v6.1.x がインストールされているコンピューターには、IBM Rational Performance Tester v7.0 をインストールできません。バージョン 7 では、Performance Optimization Toolkit の機能は Performance Tester 製品イメージに統合されているため、パッケージとして別個にインストールできなくなりました。IBM Rational Performance Tester または IBM Performance Optimization Toolkit パッケージの旧バージョンをすべてアンインストールしてから、IBM Rational Performance Tester v7.0 をインストールしてください。IBM Rational Performance Tester v7.0 のインストール中に v6.1.x 製品がインストールされていることを検出した場合、インストール・ルーチンは停止します。このソフトウェアのアンインストール方法については、旧製品の資料を参照してください。

注: v6.1.x パッケージをアンインストールしても、プロジェクト資産は削除されません。

IBM Rational Performance Tester v6.1.x 資産の v7.0 へのマイグレーション

Performance Tester 資産は、次の 2 つに分類されます。

- 再生可能な資産: 生成されたテスト・コード、.java ファイル、およびテスト・プロジェクト
- 再生不能な資産: .rec および .recmodel ファイル、テスト、スケジュール、.testsuite フィールド、カスタム・コード、ロケーション、データプール、実行ヒストリー・ファイル、統計結果、レポートなどの記録

再生可能な資産は、バージョン 6.1.0、6.1.1、6.1.2 および 7.0 で使用される場合は、自動に再作成されます。ただし、別のマシンに移動する場合は、関連付けられているクラスパスを更新しなければならない場合があります。

v6.1.x 製品で作成された再生不能な資産は、v7.0 で使用できます。このような資産がバージョン 7.0 で初めて開かれると、資産がマイグレーションされること、および前のバージョンの製品で使用できなくなることを示す警告が出されます。この警告を受け入れると、資産は保存時にバージョン 7.0 にアップグレードされます。

注: バージョン 7.0 の資産は、バージョン 6.1.x 製品の資産と互換性はありません。

IBM Performance Optimization Toolkit v6.1.x 資産の v7.0 へのマイグレーション

IBM Performance Optimization Toolkit v6.1.x で作成した資産を、IBM Rational Performance Tester v 7.0 で使用するためのマイグレーションは、公式にはサポートされていません。バージョン 7 では、Performance Optimization Toolkit の機能は Performance Tester 製品イメージに統合されているため、パッケージとして別個にインストールできなくなりました。

製品の共存についての考慮事項

一部の製品は、同じパッケージ・グループにインストールされた場合、他の製品と共存し、機能を共用するように設計されています。パッケージ・グループは、1 つ以上のソフトウェア製品またはパッケージをインストールできるロケーションです。各パッケージをインストールする場合は、そのパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新規にパッケージ・グループを作成するかを選択します。IBM Installation Manager は、共用するように設計されていない製品や、バージョンの許容度およびその他の要件を満たさない製品をブロックします。一度に複数の製品をインストールする場合は、それらの製品がパッケージ・グループを共用できなければなりません。

リリース時点で、パッケージ・グループにインストールされた場合に機能を共用する製品は、以下のとおりです。

- Rational Application Developer
- Rational Software Architect
- Rational Functional Tester
- Rational Performance Tester
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer
- Rational Tester for SOA Quality

適格製品であれば、1 つのパッケージ・グループにいくつでもインストールできます。製品がインストールされると、製品の機能はパッケージ・グループ内の他のすべての製品と共用されます。開発製品とテスト製品を 1 つのパッケージ・グループにインストールする場合、製品のいずれか一方を始動すると、開発用機能とテスト機能の両方がユーザー・インターフェースで使用可能になります。モデリング・ツールを持つ製品を追加すると、パッケージ・グループ内のすべての製品で、開発機能、テスト機能、およびモデリング機能が使用可能になります。

開発製品をインストールし、その後で追加の機能を持つ開発製品を購入して、同じパッケージ・グループにその製品を追加すると、両方の製品で追加の機能が使用可能になります。より多くの機能を持つ製品をアンインストールした場合、元の製品はそのまま残ります。これは、Rational Software Delivery Platform グループにおけるバージョン 6 製品の「アップグレード」の動作から変更された点であることに注意してください。

注: 1 つのロケーションだけにインストールされた各製品を関連付けることができるのは、1 つのパッケージ・グループのみです。複数のパッケージ・グループと関連付けるためには、製品を複数のロケーションにインストールする必要があります。

あります。 Rational Functional Tester および Rational Performance Tester は、1 つのコンピューター上の 1 つのロケーションのみ (したがって 1 つのパッケージ・グループのみ) にインストールすることができます。

インストール・リポジトリ

IBM Installation Manager は、指定のリポジトリ・ロケーションから製品パッケージを取得します。

ランチパッドを使用して Installation Manager を開始すると、リポジトリ情報が Installation Manager に渡されます。 Installation Manager を直接開始した場合は、インストールする製品パッケージが格納されたインストール・リポジトリを指定する必要があります。 『Installation Manager のリポジトリ設定』を参照してください。

製品パッケージをイントラネットに組み込み、ホスティングする企業や組織もあるでしょう。この種のインストール・シナリオについては、 10 ページの『HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者から正しい URL を提供してもらう必要があります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続します。その後、Installation Manager が製品パッケージと新規フィーチャーを検索します。

Installation Manager のリポジトリ設定

Rational Performance Tester のインストールをランチパッド・プログラムから開始する場合は、 IBM Installation Manager の開始時に、インストールする製品パッケージを含むリポジトリのロケーションが Installation Manager に自動的に定義されます。しかし、直接 Installation Manager を開始する場合 (例えば、 Rational Performance Tester を Web サーバー上にあるリポジトリからインストールする場合) は、まず Installation Manager でリポジトリ設定 (製品パッケージが含まれるディレクトリの URL) を指定しておかなければ、製品パッケージはインストールできません。このリポジトリ・ロケーションは、「設定」ウィンドウの「リポジトリ」ページで指定します。デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージおよび新規フィーチャーを検索します。組織によっては、イントラネット・サイトを使用するためにリポジトリをリダイレクトする必要があります。

注: インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリの URL を取得してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または除去するには、以下のようにします。

1. Installation Manager を開始します。
2. Installation Manager の「スタート」ページで、「ファイル」→「設定」をクリックしてから「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが

開きます。このページには、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能かどうかが表示されます。

3. 「リポジトリ」ページで、「**リポジトリの追加**」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、ブラウズしてファイル・パスを設定します。
5. 「**OK**」をクリックします。HTTPS または制限付き FTP リポジトリ・ロケーションを指定した場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。新規または変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不可の場合は、「**接続**」列に赤い x が表示されます。
6. 「**OK**」をクリックして終了します。

注: Installation Manager がインストール済みパッケージのデフォルトのリポジトリ・ロケーションを検索できるように、「リポジトリ」の設定ページで「**インストールおよび更新時にサービス・リポジトリを検索する**」の設定が選択されていることを確認します。この設定はデフォルトで選択されています。

パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリー

IBM Installation Manager を使用して Rational Performance Tester パッケージをインストールする場合は、パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリーを選択する必要があります。

パッケージ・グループ

インストール・プロセス中に、Rational Performance Tester パッケージのパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。Installation Manager を使用して Rational Performance Tester パッケージをインストールする場合は、新規パッケージ・グループを作成するか、またはパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールできます。(一部のパッケージは、パッケージ・グループを共用できない場合があります。その場合、既存パッケージ・グループを使用するオプションが使用不可になります。)

一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされる点に注意してください。

パッケージ・グループには自動的に名前が割り当てられます。ただし、パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーは選択できます。

製品パッケージのインストールが成功し、パッケージ・グループが作成された後に、インストール・ディレクトリーを変更することはできません。インストール・ディレクトリーには、パッケージ・グループにインストールされた Rational Performance Tester 製品パッケージに固有のファイルおよびリソースが含まれます。他のパッケージに使用される可能性のある製品パッケージ内のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに置かれます。

共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリー は、1 つ以上の製品パッケージ・グループで使用できるインストール作成物を配置するディレクトリーです。

重要:

- 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時に指定できます。最適な結果が得られるように、これには一番大きいドライブを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

既存の Eclipse IDE の拡張

Rational Performance Tester 製品パッケージをインストールする際に、コンピューターにすでにインストールされている Eclipse 統合開発環境 (IDE) の拡張を選択できます。拡張は、Rational Performance Tester パッケージに含まれている機能を追加することによって実現できます。

IBM Installation Manager を使用してインストールされた Rational Performance Tester パッケージには、Eclipse IDE (つまりワークベンチ) のいずれかのバージョンが組み込まれています。この組み込まれたワークベンチは、Installation Manager パッケージの機能を提供する上で基本プラットフォームになります。ただし、ご使用のワークステーション上に既存の Eclipse IDE がある場合は、それを拡張 するか (つまり、Rational Performance Tester パッケージで提供される追加機能を IDE に追加するか) を選択可能です。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで、「**既存の Eclipse の拡張**」オプションを選択します。

既存の Eclipse IDE を拡張するのは、例えば、Rational Performance Tester パッケージで提供されている機能を利用するのに加えて、Rational Performance Tester パッケージが提供する機能で作業する場合に現行 IDE の設定も保持したい場合です。また、すでに Eclipse IDE を拡張しているインストール済みのプラグインを使用して作業をしたい場合もあるでしょう。

既存の Eclipse IDE の拡張は、eclipse.org から提供される最新の更新が適用されたバージョン 3.2.2 でのみ可能です。Installation Manager は、指定した Eclipse インスタンスがインストール・パッケージの要件を満たしているか検査します。

注: Rational Performance Tester への更新をインストールするために、Eclipse のバージョンの更新が必要になる場合があります。前提条件となる Eclipse バージョンの変更についての詳細は、更新のリリース資料を参照してください。

プリインストール・タスク

製品をインストールする前に、以下のステップを実行しておく必要があります。

1. ご使用のシステムが 3 ページの『インストール要件』のセクションに記載されている要件を満たしていることを確認します。
2. ご使用のユーザー ID が製品のインストールに必要なアクセス権を満たしていることを確認します。7 ページの『ユーザー特権についての要件』を参照してください。
3. 9 ページの『インストール計画』のセクションを一読します。特に、11 ページの『アップグレードおよび共存についての考慮事項』のトピックをよくお読みください。
4. Linux 用: root 以外のユーザーも製品を使用できるようにしたい場合は、**製品をインストールする前に**、umask 変数を 0022 に設定する必要があります。この変数を設定するには、root ユーザーとしてログインして端末セッションを開始し、umask 0022 と入力してください。

インストール作業

以降のセクションでは、9 ページの『インストール・シナリオ』のセクションに記載されているインストール・シナリオの概要を示します。詳しい説明には、メイン・ステップのリンクからアクセスできます。

注: Agent Controller とデータ収集インフラストラクチャーをインストールした後で、リソース・モニターおよび応答時間明細フィーチャーを使用できるように、それらを構成する必要があります。文書の更新内容やトラブルシューティングの情報については、<http://www.ibm.com/software/rational/support/documentation/> を参照してください。

Rational Performance Tester の CD-ROM からのインストール: タスクの概要

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが含まれている CD を持っており、通常は、そこからワークステーション上に Rational Performance Tester をインストールします。

CD からインストールする一般的な手順は、次のとおりです。

1. 17 ページの『プリインストール・タスク』にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
3. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
4. システムで自動実行が有効になっている場合は、Rational Performance Tester ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。自動実行が有効になっていない場合は、ランチパッド・プログラムを開始してください。詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
5. ランチパッドから Rational Performance Tester のインストールを開始します。詳しくは、30 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。
6. 「パッケージのインストール」をクリックし、「パッケージのインストール」ウィザードの指示に従って、インストールを完了します。詳しくは、31 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール』を参照してください。
7. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Performance Tester のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、53 ページの『ワークステーション用の開発シート・ライセンスの管理』を参照してください。
8. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、61 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
9. Rational Performance Tester に付属するオプション・ソフトウェアをインストールします。

ワークステーション上の電子イメージからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要

電子インストール・イメージから Rational Performance Tester をインストールする場合の一般的な手順は、次のとおりです。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要のあるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なスペースが、ワークステーションにあることを確認してください。3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、27 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。
4. 続けて、下記の『電子イメージからのインストール』のステップを実行します。

電子イメージからのインストール

1. 17 ページの『プリインストール・タスク』にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. ランチパッドから Rational Performance Tester のインストールを開始します。詳しくは、30 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。
4. 「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、31 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール』を参照してください。
5. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Performance Tester のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、53 ページの『ワークステーション用の開発シート・ライセンスの管理』を参照してください。
6. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、61 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
7. Rational Performance Tester に付属するオプション・ソフトウェアをインストールします。

共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Performance Tester のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。

共用ドライブ上にインストール・イメージを置く人が、以下のステップを実行します。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要のあるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、共用ドライブにあることを確認してください。詳しくは、 3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、共用ドライブ上の一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを共用ドライブ上のアクセス可能なディレクトリーに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、 27 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。

共用ドライブ上のインストール・ファイルから Rational Performance Tester をインストールするには、以下のようにします。

1. インストール・イメージが含まれている共用ドライブの disk1 ディレクトリーに移動します。
2. 20 ページの『電子イメージからのインストール』のステップに従います。

HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリーからの Rational Performance Tester のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、製品パッケージは IBM Installation Manager によって HTTP または HTTPS Web サーバーから取得されます。

以下のステップは、Rational Performance Tester パッケージを含むリポジトリーが HTTP または HTTPS Web サーバー上に作成されていることを前提としています。

Rational Performance Tester パッケージを HTTP または HTTPS サーバー上のリポジトリーからインストールするには、以下のようにします。

1. 17 ページの『プリインストール・タスク』にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. このシナリオでは、例えば Installation Manager のインストール・ファイルは共用ドライブから入手できます。
3. Installation Manager を始動します。詳しくは、 24 ページの『Windows での Installation Manager の開始』を参照してください。
4. Rational Performance Tester パッケージが含まれているリポジトリーの URL を、Installation Manager のリポジトリーとして設定します。13 ページの『Installation Manager のリポジトリー設定』を参照してください。
5. Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードを開始し、「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の指示に従って、インストールを完了します。詳しくは、 31 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール』を参照してください。
6. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Performance Tester のトライアル・ライセンスが含まれています。ライセンスを設定して、引き続きアクセス

して製品で作業ができることを確認してください。詳しくは、 53 ページの『ワークステーション用の開発シート・ライセンスの管理』を参照してください。

7. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、 61 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
8. Rational Performance Tester に付属するオプションのソフトウェアをインストールします。

HTTP Web サーバー上への Rational Performance Tester の配置: タスクの概要

HTTP Web サーバー上にあるリポジトリから、インストールのために Rational Performance Tester を準備するには、次のようにします。

1. ご使用の HTTP または HTTPS Web サーバーに、製品パッケージを保管するのに十分なディスク・スペースがあることを確認します。 3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要のあるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、ワークステーションにあることを確認してください。 3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
3. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、ワークステーション上の一時ディレクトリにすべてダウンロードします。
4. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージをワークステーション上の別の一時ディレクトリに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、 27 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。
5. ご使用のプラットフォームに適した Enterprise Deployment CD (または電子イメージ) から、ワークステーションに IBM Packaging Utility をインストールします。
6. Packaging Utility を使用して、 Rational Performance Tester 製品パッケージをコピーします。
7. Packaging Utility の出力を HTTP または HTTPS Web サーバーにコピーします。
8. IBM Installation Manager のインストール・ファイルを、 Enterprise Deployment CD から共用ドライブにコピーします。
9. 社内ユーザーに Installation Manager をインストールするよう指示します。
10. 以前に作成済みの Rational Performance Tester 製品パッケージが含まれているリポジトリの URL をユーザーに提供します。

IBM Installation Manager の管理

このセクションでは、IBM Installation Manager に関連するいくつかの共通タスクを取り扱います。詳しくは、Installation Manager のオンライン・ヘルプまたは <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp> の Installation Manager インフォメーション・センターを参照してください。

Windows への Installation Manager のインストール

ランチパッド・プログラムから製品のインストールを開始する場合は、IBM Installation Manager のインストールが自動的に開始されます (ワークステーション上にまだインストールされていない場合)。(このプロセスについて詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。) このほかの場合は、Installation Manager のインストールを手動で開始する必要があります。

Installation Manager のインストールを手動で開始するには、以下のようにします。

- 1 枚目のインストール・ディスクの InstallerImage_win32 フォルダーから `install.exe` を実行します。
- 「パッケージのインストール」ページで「次へ」をクリックします。
- 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。
- 必要に応じて、「宛先フォルダー」ページの「参照」ボタンをクリックして、インストール・ロケーションを変更します。「次へ」をクリックします。
- 「要約」ページで「インストール」をクリックします。インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
- 「完了」をクリックします。IBM Installation Manager が開きます。

Linux への Installation Manager のインストール

IBM Installation Manager は、ランチパッドによってインストールされます。このプロセスについて詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。

Installation Manager を手動でインストールするには、以下のようにします。

- root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
- 1 枚目のインストール・ディスクの InstallerImager_linux フォルダーから、`install` を実行します。
- 「パッケージのインストール」画面で「次へ」をクリックします。
- 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。

5. 必要に応じてインストール・ディレクトリー・ロケーションを編集します。「次へ」をクリックします。
6. 情報の要約ページで「インストール」をクリックします。 インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
7. 「完了」をクリックします。 IBM Installation Manager が開きます。

Windows での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。こうすると、Installation Manager が、リポジトリ設定を構成し、Rational Performance Tester パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始した場合は、リポジトリの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。詳しくは、9 ページの『インストール計画』を参照してください。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. タスク バーの「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager」を選択します。

Linux での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。そのようにすると、Installation Manager が、リポジトリ設定を構成し、Rational Performance Tester パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始する場合は、リポジトリの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。詳しくは、9 ページの『インストール計画』を参照してください。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. ディレクトリーを Installation Manager のインストール・ディレクトリー (デフォルトでは /opt/IBM/InstallationManager/eclipse) に切り替え、IBMIM を実行します。

Windows での Installation Manager のアンインストール

Installation Manager をアンインストールするには、以下のようにします。

1. タスク バーの「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager のアンインストール」を選択します。
3. 「アンインストール」ページで「次へ」をクリックします。 IBM Installation Manager がアンインストールの対象として選択されます。
4. 「要約」ページで「アンインストール」をクリックします。

注: また、「コントロール パネル」を使用して、Installation Manager をアンインストールすることもできます。「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」とクリックし、「プログラムの追加と削除」をダブルクリックします。IBM Installation Manager の項目を選択し、「削除」をクリックします。

Linux での Installation Manager のアンインストール

IBM Installation Manager のアンインストールには、Linux バージョンに付属するパッケージ管理ツールを使用する必要があります。

Linux で Installation Manager を手動でアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. ディレクトリを Installation Manager のアンインストール・ディレクトリに切り替えます。デフォルトでは、これは `/var/ibm/InstallationManager/uninstall` です。
3. `./uninstall` を実行します。

Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール

IBM Installation Manager はサイレントでインストールおよびアンインストールすることができます。

Installation Manager のサイレント・インストール

Installation Manager をサイレントでインストールするには、インストーラーを `unzip` して、`InstallerImage_platform` サブディレクトリに切り替えてから、次のコマンドを使用します。

- Windows の場合: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log c:\mylogfile.xml`
- その他のプラットフォームの場合: `install --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `install --launcher.ini silent-install.ini -log /root/mylogs/mylogfile.xml`

インストールの後に、Installation Manager または Installation Manager インストーラーを使用して、パッケージをサイレントでインストールすることができます。

Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール

Windows で Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行から、Installation Manager の `uninstall` ディレクトリに移動します。デフォルトでは、これは `C:\Documents and Settings\All Users\Application Data\IBM\Installation Manager\uninstall` になります。

2. 以下のコマンドを入力します。`uninstallc.exe --launcher.ini
silent-uninstall.ini`

ほかのプラットフォームでの Installation Manager のサイレント・アンインストール

ほかのプラットフォーム上で Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. ターミナル・ウィンドウから、Installation Manager のアンインストール・ディレクトリーに移動します。デフォルトでは、これは `/var/ibm/InstallationManager/uninstall` です。
2. 以下のコマンドを実行します。`uninstall --launcher.ini silent-uninstall.ini`

電子イメージの確認および解凍

IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードした場合は、Rational Performance Tester をインストールする前に、圧縮ファイルから電子イメージを解凍してください。

インストール・ファイルをダウンロードする際に「Download Director」オプションを選択すると、Download Director アプレットが、処理する各ファイルの完全性を自動的に確認します。

ダウンロードしたファイルの解凍

圧縮ファイルは、それぞれ同じディレクトリーに解凍します。Linux の場合: ディレクトリー名にスペースを入れないでください。スペースを入れると、コマンド行からランチパッドを開始する `launchpad.sh` コマンドを実行できなくなります。

ランチパッド・プログラムからのインストール

ランチパッド・プログラムを使用すると、1 つのロケーションでリリース情報の表示およびインストール・プロセスの開始を行うことができます。

以下の場合に、ランチパッド・プログラムを使用して、Rational Performance Tester のインストールを開始します。

- 製品 CD からのインストール
- ローカル・ファイル・システム上の電子イメージからのインストール
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

ランチパッド・プログラムからインストール・プロセスを開始すると、IBM Installation Manager は、コンピューター上にまだ存在しない場合自動的にインストールされ、Rational Performance Tester パッケージが含まれているリポジトリのロケーションで事前に構成された状態で始動します。Installation Manager を直接インストールして開始する場合は、手動でリポジトリ設定を行う必要があります。

ランチパッドからインストールするには、以下のようにします。

1. プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、17 ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. Rational Performance Tester のインストールを開始します。30 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、31 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール』を参照してください。

ランチパッド・プログラムの開始

プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、17 ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。

CD からインストールする場合に、ワークステーション上で自動実行が使用可能になっているときは、1 枚目のインストール・ディスクを CD ドライブに挿入すると、Rational Performance Tester ランチパッドが自動的に開始します。電子イメージからインストールする場合、もしくは、ワークステーション上で自動実行が構成されていない場合は、ランチパッド・プログラムを手動で開始する必要があります。

ランチパッド・プログラムを開始するには、以下のようにします。

1. IBM Rational Performance Tester CD を CD ドライブに挿入します。Linux 用: CD ドライブがマウントされていることを確認します。

2. システムで自動実行が有効になっている場合は、IBM Rational Performance Tester ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。システムで自動実行が使用不可の場合は、以下のようにします。
 - Windows 用: CD のルート・ディレクトリーにある launchpad.exe を実行します。
 - Linux 用: CD のルート・ディレクトリーにある launchpad.sh を実行します。

ランチパッド・プログラムからのインストールの開始

1. ランチパッド・プログラムを開始します。
2. リリース情報をまだ読んでいない場合は、「リリース・ノート (Release notes)」をクリックしてお読みください。
3. インストールの開始準備ができたなら、「**IBM Rational Performance Tester のインストール**」をクリックします。
4. システム上で IBM Installation Manager が検出されない場合、または古いバージョンがすでにインストールされている場合は、最新のリリースのインストールを行う必要があります。
5. ウィザードの指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、23 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
6. IBM Installation Manager のインストールが正常に完了したら、「完了」をクリックしてウィザードを閉じます。インストールが完了したら、IBM Installation Manager が自動的に開きます。
7. これが新規のインストールである場合は、「**パッケージのインストール**」をクリックし、ウィザードの指示に従って、インストール・プロセスを最後まで実行します。詳しくは、31 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール』を参照してください。
8. これが製品の更新である場合は、「**パッケージの更新**」をクリックし、ウィザードの指示に従って、更新プロセスを最後まで実行します。詳しくは、63 ページの『Rational Performance Tester の更新』を参照してください。

Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール

以下のステップでは、Installation Manager グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用しての IBM Rational Performance Tester パッケージのインストールについて説明します。

1. 「Installation Manager スタート」ページで、「パッケージのインストール」をクリックします。

注: Installation Manager の新しいバージョンが検出されると、そのバージョンのインストールの確認を求めるプロンプトが表示されます。これを確認しないと、続行することはできません。「OK」をクリックして先に進みます。Installation Manager は自動的に、新しいバージョンのインストール、停止、再始動、および再開を実行します。

2. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページに、Installation Manager が検索したリポジトリ内で検出されたすべてのパッケージがリストされます。1 つのパッケージについて 2 つのバージョンが検出された場合は、最新バージョンまたは推奨バージョンのパッケージのみが表示されます。

- Installation Manager で検出されたすべてのバージョンのパッケージを表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。
- 推奨パッケージのみの表示に戻すには、「推奨のみを表示」をクリックします。

3. IBM Rational Performance Tester パッケージをクリックすると、「詳細」ペインにその説明が表示されます。
4. IBM Rational Performance Tester パッケージに対する更新を検索するには、「ほかのバージョンおよび拡張の検査」をクリックします。

注: Installation Manager が、事前に定義された IBM 更新リポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索するには、「リポジトリ」の設定ページで「インストールおよび更新時にリンク・リポジトリを検索する」設定を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。インターネットへのアクセスも必要です。

Installation Manager は、製品パッケージ用に事前に定義された IBM 更新リポジトリで更新を検索します。リポジトリ・ロケーションを設定した場合は、その場所も検索します。進行標識に検索状況が表示されます。基本製品パッケージのインストールと同時に更新もインストールできます。

5. IBM Rational Performance Tester パッケージの更新が検出されると、「パッケージのインストール」ページの各製品の下に「インストール・パッケージ」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。
- 使用可能なパッケージ用に検出された更新をすべて表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。

- 「詳細」でパッケージの説明を表示するには、パッケージ名をクリックします。README ファイルやリリース・ノートなど、パッケージに関する追加情報が入手可能な場合は、説明文の最後に「詳細情報」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザに追加情報が表示されます。インストールするパッケージを完全に理解するためには、事前にすべての情報に目を通しておくようにしてください。
- 6. インストールする IBM Rational Performance Tester パッケージおよびそのパッケージに対する更新 (ある場合) を選択します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択および選択解除されます。「次へ」をクリックして続けます。

注: 一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされます。

- 7. 「ライセンス」ページで、選択したパッケージのご使用条件を読んでください。

複数のパッケージをインストールするよう選択した場合は、各パッケージにご使用条件がある場合があります。「ライセンス」ページの左側で、各パッケージのバージョンをクリックして、ご使用条件を表示してください。インストールするために選択したパッケージのバージョン (例えば、基本パッケージと更新) は、パッケージ名の下にリストされます。

- a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックします。
- b. 「次へ」をクリックして続けます。
- 8. 「ロケーション」ページで、「共用リソース・ディレクトリー」フィールドに共用リソース・ディレクトリー のパスを入力するか、デフォルト・パスを受け入れます。共用リソース・ディレクトリーには、1 つ以上のパッケージ・グループが共用できるリソースが含まれています。「次へ」をクリックして続けます。

デフォルト・パスは次のようになります。

- Windows 用: C:\Program Files\IBM\SDP70Shared
- Linux 用: /opt/IBM/SDP70Shared

重要: 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時のみ指定できます。将来のパッケージの共用リソースに十分なスペースを確保するために、これには一番大きいディスクを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

- 9. 「ロケーション」ページで、IBM Rational Performance Tester パッケージのインストール先のパッケージ・グループを作成します。または、これが更新の場合は、既存のパッケージ・グループを使用します。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。新しいパッケージ・グループを作成するには、以下のようになります。
- a. 「新規パッケージ・グループの作成」をクリックします。
- b. パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーのパスを入力します。パッケージ・グループの名前が自動的に作成されます。

デフォルト・パスは次のようになります。

- Windows 用: C:\Program Files\IBM\SDP70
- Linux 用: /opt/IBM/SDP70

c. 「次へ」をクリックして続けます。

10. 次の「ロケーション」ページで、インストールするパッケージに機能を追加して、システムにすでにインストールされている既存の Eclipse IDE を拡張することができます。このオプションを選択するには、eclipse.org から提供される最新の更新が適用された Eclipse バージョン 3.2.1 を使用していなければなりません。
 - 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「次へ」をクリックして続けます。
 - 既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下のようにします。
 - a. 「既存の Eclipse の拡張」を選択します。
 - b. 「Eclipse IDE」フィールドに Eclipse 実行可能ファイル (eclipse.exe または eclipse.bin) が含まれているフォルダーのロケーションを入力するか、またはそのロケーションにナビゲートします。Installation Manager は、Eclipse IDE のバージョンが、インストールするパッケージで有効であるかどうかを検査します。「Eclipse IDE JVM」フィールドに、指定した IDE の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。
 - c. 「次へ」をクリックして続けます。
11. 「フィーチャー (Features)」ページの「言語」で、パッケージ・グループの言語を選択します。IBM Rational Performance Tester パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。
12. 次の「フィーチャー (Features)」ページで、インストールするパッケージ・フィーチャーを選択します。
 - a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「依存関係の表示」を選択します。
 - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、「詳細」の下に簡単な説明が表示されます。
 - c. パッケージのフィーチャーを選択または選択解除します。Installation Manager は、他のフィーチャーとの依存関係を自動的に強制し、ダウンロード・サイズおよびインストールに必要なディスク・スペース所要量を更新して表示します。
 - d. フィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックして続けます。
13. IBM Rational Performance Tester パッケージをインストールする前に「要約」ページで選択項目を検討します。前のページで選択した項目を変更したい場合は、「戻る」をクリックして変更を行います。インストール用の選択内容に問題がなければ、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識にインストールの完了パーセントが表示されます。
14. インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。

- a. 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのインストール・ログ・ファイルを開きます。処理を続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 - b. 「**パッケージのインストール**」ウィザードで、終了時に **IBM Rational Performance Tester** を開始するかどうかを選択します。
 - c. 「**完了**」をクリックして、選択したパッケージを起動します。「パッケージのインストール」ウィザードが閉じ、**Installation Manager** の「**スタート**」ページに戻ります。
15. データ収集インフラストラクチャー・ソフトウェアがインストールされている場合は、次のステップを実行して、データ収集用のテスト・サーバーを使用可能にします。
- a. 「**スタート**」メニューで、「**IBM Software Delivery Platform**」 → 「**IBM Rational Data Collection Infrastructure**」 → 「**Application Server Instrumenter**」と選択し、インストゥルメンテーション・アプリケーションを開きます。
 - b. 「**ローカルの追加 (Add Local)**」ボタンをクリックし、サーバー上で実行しているアプリケーション・サーバーのタイプを選択します。
 - c. 必要に応じて、サーバーのロケーションなどのサーバー・タイプ固有のフィールドに情報を入力し、「**OK**」をクリックします。
 - d. インストゥルメンテーションが有効になるように、サーバーを停止してから起動します。
 - e. 「**スタート**」メニューで、「**IBM Software Delivery Platform**」 → 「**IBM Rational Data Collection Infrastructure**」 → 「**データ収集の開始 (Start Data Collection)**」と選択します。

注: Rational Performance Tester のテスト・スケジュールの結果においてトランザクション分類機能を利用できるようにするため、データ収集インフラストラクチャーに関係するすべての Rational Performance Tester システムでデータ収集ソフトウェアが実行されていなければなりません。

注: サーバーをインストゥルメントまたはアンインストゥルメントしているときに、Application Server Instrumenter または instrumentServer.bat (または instrumentServer.sh) バッチ・ファイルが異常終了し、汎用エラー・メッセージ (「インストール/アンインストール中にエラーが発生しました」) が発行されることがあります。このエラーが発生した場合は、IBM Tivoli® の共通ディレクトリーにあるログ・ファイルで詳細情報を見つけて、エラーのトラブルシューティングに役立てることができます。Windows では、このディレクトリーのデフォルト・ロケーションは C:\Program Files\IBM\tivoli\common です。Linux では、このディレクトリーのデフォルト・ロケーションは /var/ibm/tivoli/common です。IBM Tivoli の共通ディレクトリーがデフォルト・ロケーションにない場合は、tivoli/common を含むパスを検索するか、ログ・ファイル trace-install.log、trace-ma.log、または trace-tapmagent.log を検索します。

注: Websphere Application Server 6.x で、新しいプロファイルを作成し、最初に WebSphere® Application Server を始動せずに Application Server Instrumenter を使用してこのプロファイルをインストゥルメントすると、

Application Server Instrumenter は、サーバーがインストールされたことを報告し、サーバーを手動で再始動するように要求します。このメッセージは誤りで、サーバーは実際にはインストールされていません。この問題が発生した場合は、次の手順に従ってください。

- a. Application Server Instrumenter を閉じてから再始動します。
- b. インストール済みサーバーのリストから、追加したばかりの項目を選択し、「**除去**」をクリックします。
- c. WebSphere Application Server を再始動します。
- d. Application Server Instrumenter を再始動し、これを使用してサーバーをインストールします。

この問題を回避するには、新しいプロファイルを作成した後で、WebSphere Application Server プロファイルを手動で開始します。その後、Application Server Instrumenter を使用してサーバーをインストールします。

サイレント・インストール

Rational Performance Tester 製品パッケージは、Installation Manager をサイレント・インストール・モードを実行してインストールできます。Installation Manager をサイレント・モードで実行する場合は、ユーザー・インターフェースは使用できません。代わりに、Installation Manager は応答ファイルを使用して、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。Installation Manager インストーラーを使用して、Installation Manager のインストールをサイレントで実行することもできます。その後、インストーラーを使用して、製品パッケージをサイレントでインストールすることができます。

Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、バッチ処理でスクリプトを通じて製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールを行えるため便利です。

Rational Performance Tester パッケージをサイレント・インストールする前に、Installation Manager をインストールする必要があることに注意してください。Installation Manager のインストールについて詳しくは、23 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。

サイレント・インストールに必要な主要な作業は、以下の 2 つです。

注: Rational Performance Tester と一緒にデータ収集インフラストラクチャーをサイレントでインストールするには、追加の応答ファイルを作成しなければなりません。

1. 応答ファイルの作成。
2. Installation Manager のサイレント・インストール・モードでの実行。

Installation Manager を使用した応答ファイルの作成

Installation Manager または Installation Manager インストーラーを使用して、Rational Performance Tester の製品パッケージのインストール時のアクションを記録することにより、応答ファイルを作成することができます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager の GUI で選択した項目がすべて XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイルを使用して、パッケージが含まれているリポジトリの検索、インストールするフィーチャーの選択などを行います。

インストール (またはアンインストール) 用の応答ファイルを記録するには、以下のようになります。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。例:
 - Windows の場合: `cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse`
 - その他のプラットフォームの場合: `cd /opt/IBM/InstallationManager/eclipse`

2. コマンド行で次のコマンドを入力して、Installation Manager を開始します。応答ファイルおよび (オプションで) ログ・ファイルのファイル名およびロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。

- IBMIM -record <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>。例: IBMIM.exe -record c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\record_log.xml
- オプションの -skipInstall <agentDataLocation> 引数を追加すると、製品をインストールまたはアンインストールすることなく、応答ファイルを記録することができます。 <agentDataLocation> は書き込み可能なディレクトリでなければなりません。この引数を指定すると、Installation Manager が製品をインストールせずにインストール・データを保存します。次の記録セッションで同じ <agentDataLocation> を使用して、製品に対する更新や変更を記録したり、ライセンス管理を記録したりすることができます。-skipInstall 引数を使用しない場合のインストールで設定した可能性のある設定 (インストールされる製品や、リポジトリの設定値など) は保存されないことに注意してください。-skipInstall を使用すると、IM が製品をインストールせずに、インストール・データを記録するだけなので、インストールを高速に実行できます。

skipInstall 引数を使用する場合の構文は、IBMIM -record <応答ファイルのパスおよび名前> -skipInstall <エージェント・データ・ロケーションの書き込み可能なディレクトリ> となります。例: IBMIM -record c:\mylog\responsefile.xml -skipInstall c:\temp\recordData

注: 入力するファイル・パスが存在することを確認してください。 Installation Manager では、応答ファイルとログ・ファイル用のディレクトリは作成されません。

3. 「パッケージのインストール」ウィザードの指示に従って、インストールのための選択を行います。詳しくは、31 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Performance Tester のインストール』を参照してください。
4. 「完了」をクリックして Installation Manager を閉じます。

コマンドで指定したロケーションに XML 応答ファイルが作成されます。

データ収集インフラストラクチャー応答ファイルの作成

サイレント・インストール時にデータ収集インフラストラクチャーを組み込むためには、オペレーティング・システムの一時的ディレクトリに次の UTF-8 テキスト・ファイル (rpt_dci.rsp) が置かれていなければなりません。

```
-V VAccessAll=true
-V VAccessLocal=false
-V VAccessCustom=false
-V VHosts=" "
```

注: VHosts には、コンマで区切った有効なホスト・システムのリストを指定します。

1. オペレーティング・システムまたはログイン・プロファイルで使用する一時ディレクトリを決定します。例えば、Windows では、コマンド行から set と入力します。set 変数のリストが表示されます。ここで、tmp に割り当てられている

値を探します。これが、サイレント・インストール・ルーチンが `rpt_dci.rsp` 応答ファイルを探す一時ディレクトリーです。

2. ディレクトリーをこの一時ディレクトリーに変更します。
3. 先ほどリストした引数を格納する、`rpt_dci.rsp` という名前の UTF-8 テキスト・ファイルを作成します。

Installation Manager インストーラーを使用した応答ファイルの記録

Installation Manager インストーラーを使用して、Installation Manager やその他の製品のインストールを記録することができます。

Installation Manager のインストールを記録するには、次のステップを実行します。

1. Installation Manager を unzip してから、`InstallerImage_platform` ディレクトリーに移動します。
2. 記録を開始するには、次のコマンドを入力します。 `install -record <応答ファイルのパスおよび名前> -skipInstall <agentDataLocation> -vmargs -Dcom.ibm.cic.agent.hidden=false`

インストーラーを使用した製品インストールの記録

Installation Manager インストーラーを使用して製品のインストールの記録を開始するには、次のステップを実行します。

1. Installation Manager を unzip した場所の `InstallerImage_platform` ディレクトリーに移動します。
2. `-input` および `@osgi.install.area/install.xml` という行を除去して、`install.ini` ファイルを開きます。
3. 次のコマンドを入力します。 `install -record <応答ファイルのパスおよび名前> -skipInstall <agentDataLocation>`。例: `install -record`
4. Installation Manager を始動して、「パッケージのインストール」ウィザードを最後まで実行します。

サイレント・モードでの Installation Manager のインストールと実行

Installation Manager インストーラーを使用して Installation Manager をインストールした後、Installation Manager を使用して、コマンド行からサイレント・インストール・モードで製品パッケージをインストールします。

Installation Manager をサイレント・モードで実行する方法に関するその他の資料については、Installation Manager の Web サイトを参照してください。例えば、認証 (ユーザー ID とパスワード) を必要とするリポジトリからのサイレント・インストールなどの説明が掲載されています。

次の表は、サイレント・インストール・コマンドで使用される引数を示したものです。

引数	説明
-vm	Java ランチャーを指定します。 サイレント・モードでは、Windows の場合は java.exe、その他のプラットフォームの場合は java を必ず使用します。
-nosplash	スプラッシュ画面を抑止することを指定します。
--launcher.suppressErrors	JVM エラー・ダイアログを抑止することを指定します。
-silent	Installation Manager インストーラーまたは Installation Manager をサイレント・モードで実行することを指定します。
-input	Installation Manager インストーラーまたは Installation Manager への入力として、XML 応答ファイルを指定します。 応答ファイルには、インストーラーまたは Installation Manager が実行するコマンドが含まれています。
-log	(オプション) サイレント・インストールの結果を記録するログ・ファイルを指定します。 ログ・ファイルは XML ファイルです。

Installation Manager インストーラーおよび Installation Manager のどちらにも、初期化ファイル、つまり .ini ファイル silent-install.ini があります。このファイルのテーブル内に引数のデフォルト値が含まれています。

Installation Manager インストーラーは、Installation Manager のインストールに使用されます。 Installation Manager をサイレントでインストールするには、次のステップを実行します。

Installation Manager をサイレントでインストールするには、インストーラーを unzip して、eclipse サブディレクトリーに切り替えてから、次のコマンドを使用します。

- Windows の場合: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log c:\mylogfile.xml`
- その他のプラットフォームの場合: `install --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `install --launcher.ini silent-install.ini -log /root/mylogs/mylogfile.xml`

Installation Manager をインストールしたら、これを使用して、ほかの製品をインストールすることができます。Installation Manager インストーラーを使用して、製品をインストールすることもできます。

Installation Manager をサイレント・モードで実行するには、eclipse サブディレクトリーから次のコマンドを実行します。

- Windows の場合: IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>。例:
IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml
- その他のプラットフォームの場合: IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>。例: IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input /root/mylog/responsefile.xml ?log /root/mylog/silent_install_log.xml

Installation Manager インストーラーを使用して製品をサイレントでインストールする場合は、eclipse ディレクトリーから、次のコマンドを入力します。

- Windows の場合: installc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>。例:
installc --launcher.ini silent-install.ini -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml
- その他のプラットフォームの場合: install.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>。例: IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input /root/mylog/responsefile.xml ?log /root/mylog/silent_install_log.xml

Installation Manager インストーラーまたは Installation Manager がサイレント・インストール・モードで実行されると、応答ファイルを読み取り、ユーザーが指定したディレクトリーにログ・ファイルを書き込みます。サイレント・インストール・モードで実行する場合、応答ファイルは必須ですが、ログ・ファイルはオプションです。この実行の結果、成功時は状況として 0 が戻され、失敗時はゼロ以外の数値が戻されます。

すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール

すべての使用可能な製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。ログ・ファイル (オプション) のロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。
 - Windows の場合: IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -installAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>
 - その他のプラットフォームの場合: IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -installAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>

Installation Manager に認識されているすべての使用可能な製品がインストールされます。

現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール

現在インストールされているすべての製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品に対する更新を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。ログ・ファイル (オプション) のロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。
 - Windows の場合: IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -updateAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>
 - その他のプラットフォームの場合: IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -updateAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>

Installation Manager で認識されているすべての使用可能な製品の更新がインストールされます。

応答ファイルのコマンド

Installation Manager のサイレント・インストール機能を使用する場合は、Installation Manager で実行する必要のあるすべてのコマンドを含む応答ファイルを作成する必要があります。これを行う際に推奨されるのは、IBM Rational Performance Tester パッケージのインストール時のアクションを記録することによって、応答ファイルを作成する、という方法です。ただし、応答ファイルは手動で作成したり編集したりすることができます。

応答ファイルのコマンドには、以下の 2 つのカテゴリーがあります。

- **設定コマンド**は、Installation Manager で「ファイル」→「設定」と選択したときに表示される設定 (リポジトリ・ロケーション情報など) を行う場合に使用します。
- **サイレント・インストール・コマンド**は、Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードをエミュレートするために使用します。

サイレント・インストール設定コマンド

通常は「設定」ウィンドウを使用して設定を指定しますが、サイレント・インストール中に使用する応答ファイルに設定 (キーとして識別されます) を指定することもできます。

注: 応答ファイルには、複数の設定を指定できます。

応答ファイルに設定を定義する場合、使用する XML コードは次の例のようになります。

```
<preference
  name = "the key of the preference"
  value = "the value of the preference to be set">
</preference>
```

次の表に、サイレント・インストール設定用のキーとそれに関連した値を示します。

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.logLocation	Installation Manager のログ・ファイルのロケーションを指定します。	重要: このキーはオプションで、テストとデバッグ用に設計されています。ログ・ファイルのロケーションが未指定である場合、Installation Manager のサイレント・インストールと UI バージョンの両方で同じロケーションが使用されます。
com.ibm.cic.license.policy.location	リモート・ライセンス・ポリシー・ファイルを置く場所を定義する URL を指定します。	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyUseSocks	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyPort	ポート番号	

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache	c:\IBM\common (Windows) /opt/IBM/common (Linux) 注: 上記のパスは、この設定のデフォルト値です。通常、各インストール・パッケージには、この設定にそれぞれ固有の値があります。	すでにパッケージをインストール済みである場合は、このロケーションは変更できません。
com.ibm.cic.agent.core.pref.offering.service.repositories.areUsed	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。 「True」の場合、製品のインストールまたは更新時に、リンクされているすべてのリポジトリが検索されます。

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences. preserveDownloadedArtifacts	True または False	<p>使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。</p> <p>「True」の場合、パッケージを前のバージョンにロールバックするために必要なファイルがシステムに保管されます。</p> <p>「False」の場合、これらのファイルは保管されません。これらのファイルを保管しない場合、ロールバックするためには、元のリポジトリまたはメディアに接続する必要があります。</p>

サイレント・インストール・コマンド

次の表では、サイレント・インストール時に使用する応答ファイル・コマンドについての詳細を示します。

応答ファイルのコマンド	説明
<p>プロファイル</p> <pre> <profile id="プロファイル (パッケージ・グループ) ID" installLocation="the install location of the profile"> <data key="key1" value="value1"/> <data key="key2" value="value2"/> </profile> </pre>	<p>このコマンドは、パッケージ・グループ (またはインストール・ロケーション) を作成する場合に使用します。指定したパッケージ・グループがすでに存在する場合は、このコマンドの影響はありません。現在サイレント・インストールでは、プロファイルを作成すると、2 つのインストール・コンテキストも作成されます。1 つは Eclipse 用で、もう 1 つはネイティブ用です。プロファイルは、インストール・ロケーションです。</p> <p>プロファイルのプロパティを設定するには、<data> エレメントを使用します。</p> <p>現在サポートされているキーおよび関連する値は次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • eclipseLocation キーは、c:\myeclipse\ eclipse など、既存の Eclipse ロケーション値を指定します。 • cic.selector.nl キーは、zh、ja、en など、自然言語 (NL) のロケール選択を指定します。 <p>注: NL 値が複数ある場合はコンマで区切ります。</p> <p>現在サポートされている言語コードは次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 英語 (en) • フランス語 (fr) • イタリア語 (it) • 中国語 (簡体字) (zh) • ロシア語 (ru) • 中国語 (繁体字) (台湾) (zh_TW) • 中国語 (繁体字) (香港) (zh_HK) • ドイツ語 (de) • 日本語 (ja) • ポーランド語 (pl) • スペイン語 (es) • チェコ語 (cs) • ハンガリー語 (hu) • 韓国語 (ko) • ポルトガル語 (pt_BR)

応答ファイルのコマンド	説明
リポジトリ <pre> <server> <repository location="http://example/ repository/"> <repository location="file:/C:/ repository/"> <!--以下にリポジトリを追加--> <...> </server> </pre>	このコマンドを使用して、サイレント・インストール中に使用するリポジトリを指定します。リモート・リポジトリを指定する場合は URL または UNC パスを使用し、ローカル・リポジトリを指定する場合はディレクトリー・パスを使用します。
インストール <pre> <install> <offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "offering id" version= "offering version"></offering> <!--以下にオファリングを追加> <...> </install> </pre>	<p>このコマンドを使用して、インストールするインストール・パッケージを指定します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイルまたはプロファイル設定コマンドで作成されたプロファイルと一致している必要があります。</p> <p>フィーチャー ID は、コンマで区切られたリスト (「feature1, feature2」など) によって、オプションで指定できます。フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのデフォルト・フィーチャーがインストールされます。</p> <p>バージョン番号は不要です。バージョンが指定されていない場合、Installation Manager は指定された ID を持つ最新の製品と使用可能な更新およびフィックスをインストールします。</p> <p>注: 必須フィーチャーは、コンマで区切られたリストで明示的に指定されていない場合でも、インストールされます。</p>
<pre> <install modify="true"> または <uninstall modify="true"> (オプション属性) <uninstall modify="true"> <offering profile="プロファイル ID" id="Id" version="バージョン" features="-"/> </uninstall> </pre>	<p>既存のインストールの変更を指示する場合は、install コマンドおよび uninstall コマンドの <install modify="true"> 属性を使用します。この属性が true に設定されていない場合、値はデフォルトの false に設定されます。追加の言語パックのインストールのみを目的として変更操作を行う場合、オファリング・フィーチャー ID リストでハイフン「-」を使用して、新しいフィーチャーを追加しないことを指定する必要があります。</p> <p>重要: 例で指定しているように、「modify=true」とハイフン「-」から成るフィーチャー・リストを指定してください。そのようにしなければ、install コマンドではオファリングのデフォルト・フィーチャーがインストールされ、uninstall コマンドではすべてのフィーチャーが除去されます。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
<p>アンインストール</p> <pre><uninstall> <offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "offering id" version= "offering version"></offering> <!--以下にオファリングを追加> <...> </uninstall></pre>	<p>このコマンドは、アンインストールするパッケージを指定する場合に使用します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイルまたはプロファイル・コマンドで指定されたプロファイルに一致している必要があります。さらに、フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのフィーチャーがアンインストールされます。製品 ID が指定されていない場合は、指定のプロファイル内のすべてのインストール済み製品がアンインストールされます。</p>
<p>ロールバック</p> <pre><rollback> <offering profile= "プロファイル ID" id= "製品 ID" version= "製品バージョン"> </offering> <!--以下にオファリングを追加> <...> </rollback></pre>	<p>このコマンドは、指定したプロファイルに現在インストールされているバージョンから、指定したオファリングへロールバックする場合に使用します。 rollback コマンドでフィーチャーを指定することはできません。</p>
<p>すべてインストール</p> <pre><installALL/></pre> <p>注: このコマンドは、次のコマンドを使用した場合と同じ処理を実行します。</p> <pre>-silent -installAll</pre> <p>.</p>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、インストールする場合に使用します。</p>
<p>すべて更新</p> <pre><updateALL/></pre> <p>注: このコマンドは、次のコマンドを使用した場合と同じ処理を実行します。</p> <pre>-silent -updateAll</pre> <p>.</p>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、更新する場合に使用します。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
ライセンス <code><license policyFile="policy file location"/></code> 例: <code><license policyFile="c:\mylicense.opt"/></code>	<p>このコマンドは、レコード・モードで Installation Manager を始動してからライセンス・ウィザードを開始することで、license コマンドを含む応答ファイルを生成する場合に使用します。</p> <p>レコード・モード時に、ライセンス管理ウィザードでフレックス・オプションを設定すると、設定されたオプションは、生成された応答ファイルと同じディレクトリーにある「license.opt」という名前のライセンス・ポリシー・ファイルに記録されます。応答ファイルには、そのポリシー・ファイルを参照する license コマンドが記述されます。</p>
ウィザード <code><launcher -mode wizard -input < response file ></code>	<p>このコマンドは、UI モードで Installation Manager を始動する場合に使用します。UI モードでは、Installation Manager の始動時にインストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードのいずれかが表示されます。ただしこの場合、応答ファイルに記述できるのは、preference コマンドおよび install コマンドの組み合わせと、preference コマンドおよび uninstall コマンドの組み合わせのいずれかのみです。Installation Manager を UI モードで実行する場合は、同じ応答ファイルに install コマンドと uninstall コマンドを一緒に記述することはできません。</p>

応答ファイルの属性の追加

応答ファイルの属性	説明
クリーン <code><agent-input clean="true"></code> <code></agent-input></code>	<p>デフォルトは、clean="false" です。</p> <p>Installation Manager は、Installation Manager 内の既存の設定に加えて、リポジトリ、および応答ファイル内で指定されている他の設定を使用します。設定が応答ファイルと Installation Manager の両方で指定されている場合は、応答ファイル内の設定が優先されます。</p> <p>clean="true" に設定した場合、Installation Manager は、リポジトリ、および応答ファイル内で指定されている他の設定を使用します。Installation Manager 内で設定されている既存の設定は使用されません。</p>

応答ファイルの属性	説明
一時 <code><agent-input clean="true" temporary="false"></code> <code></agent-input></code>	<p>デフォルトでは <code>temporary</code> は「false」に設定され、応答ファイルに設定されている設定が保持されます。<code>temporary="true"</code> に設定すると、応答ファイルに設定されている設定は保持されません。</p> <p>「一時」および「クリーン」属性を共に使用できます。例えば、<code>clean</code> を <code>true</code> に設定し、<code>temporary</code> を <code>false</code> に設定すると、サイレント・インストールの実行後、Installation Manager を使用して以前のセッションで設定された設定は、応答ファイルに指定されているリポジトリ設定値によってオーバーライドされます。</p>
ご使用条件の受諾 <code><agent-input acceptLicense="false"></code> <code></agent-input></code>	<p>デフォルトでは、Installation Manager をサイレント・インストール・モードで使用する場合、インストール・パッケージによって示されるご使用条件にすべて同意することになっています。ご使用条件に同意しない場合、<code><agent-input></code> エlementに追加属性 <code><agent-input acceptLicense="false"></code> を使用し、サイレント・インストール操作が自動的に失敗に終わるようにできます。インストール中のインストール・パッケージに、同意しなければならないご使用条件がある場合、サイレント・インストール操作は失敗します。</p>

参照: サンプル応答ファイル

XML ベースの応答ファイルを使用すると、サイレント・インストール設定、リポジトリのロケーション、インストール用プロファイルなどの事前定義情報を指定できます。応答ファイルは、インストール・パッケージをサイレントでインストールし、インストール・パッケージのロケーションと設定を標準化するチームや会社に役に立ちます。

サンプル応答ファイル

```
<agent-input >

<!-- add preferences -->
<preference name="com.ibm.cic.common.core.preferences. http.proxyEnabled"
value="c:/temp"/>

<!-- create the profile if it doesn't exist yet -->
<profile id="my_profile" installLocation="c:/temp/my_profile"></profile>

<server>
<repository location=
"http://a.site.com/local/products/sample/20060615_1542/repository/"></repository>
</server>

<install>
  <offering profile= "my_profile" features= "core" id= "ies"
version= "3.2.0.20060615">
  </offering>
</install>

</agent-input>
```

サイレント・インストール・ログ・ファイル

サイレント・インストール・ログ・ファイルを使用すると、サイレント・インストール・セッションの結果を検査できます。

サイレント・インストール機能によって、XML ベースのログ・ファイルが作成されます。このログ・ファイルには、サイレント・インストール実行の結果が記録されます。これは、`-log <ログ・ファイルのパス>.xml` を使用してログ・ファイル・パスが指定されている場合です。サイレント・インストール・セッションが正常に行われた場合、ログ・ファイルには、`<result> </result>` のルート・エレメントのみが含まれます。しかし、インストール中にエラーが発生した場合は、以下のようなエラー・エレメントが、メッセージとともにサイレント・インストール・ログ・ファイルに記録されます。

```
<result>
  <error> Cannot find profile: profile id</error>
  <error> some other errors</error>
</result>
```

詳細な分析については、Installation Manager データ域に生成されたログを参照してください。設定コマンドを使用することにより、選択したロケーションにデータ域をオプションで設定できます (応答ファイルのトピックを参照)。

ワークステーション用の開発シート・ライセンスの管理

インストール済みの IBM ソフトウェアおよびカスタマイズ・パッケージの開発シート・ライセンスは、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して管理します。「ライセンスの管理」ウィザードでは、インストール済みのパッケージごとにライセンス情報が表示されます。

Rational Performance Tester バージョン 7.0 以降に付属している開発シート・ライセンスは試用版ライセンスで、インストール後 30 日で有効期限が切れます。有効期限日以降にも継続して Rational Performance Tester を使用するには、開発シート・ライセンスを購入してアクティベーションする必要があります。

「ライセンスの管理」ウィザードを使用すると、プロダクト・アクティベーション・キットをインポートして本製品の試用バージョンをライセンス交付を受けたバージョンにアップグレードしたり、フローティング・ライセンスの適用を可能にして、ライセンス・サーバーから入手したフローティング開発シート・ライセンス・キーを使用したりできます。

重要: また、Rational Performance Tester では、フローティング・ライセンスを使用して、テスト再生中にプロトコル拡張機能や仮想テスターを使用できます。こうしたフローティング・ライセンスは、開発シート・フローティング・ライセンスを提供するのと同じライセンス・サーバーから取得できます。ただし、以下の規定が適用されます。

- 開発シート・フローティング・ライセンスは、Rational License Server for UNIX® v7.0.0.1 または Rational License Server for Windows v7.0.1 以降のバージョンのみによって提供されます。
- テスト再生用のフローティング・ライセンスは、新しいサーバーからの開発シート・フローティング・ライセンスとともに提供され、古いサーバーからの開発シート・フローティング・ライセンスとは別に提供される場合もあります。

このトピックにおけるフローティング・ライセンスとは、開発シート・フローティング・ライセンスのことです。このトピックで他のライセンスに言及する場合には、そのように特定されます。

テスト再生用のフローティング・ライセンスの管理については、59 ページの『プロトコル・キーおよび仮想テスター・ライセンス・キー・バックの管理』を参照してください。

ご使用の Rational 製品の開発シート・ライセンスの管理について詳しくは、以下の情報を参照してください。

- Rational 製品のアクティベーションについて説明した技術情報 (<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21250404>)。
- Rational ライセンス・サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/rational/support/licensing/>)。

ライセンス

IBM Rational ソフトウェア製品の購入者として、許可ユーザー・ライセンス、許可ユーザー期限付使用权 (FTL)、およびフローティング・ライセンスの 3 つのタイプの製品ライセンスの中から選択することができます。どのタイプのライセンスが組織に最適であるかは、製品を使用する人数、アクセス頻度、ソフトウェア購入の方針などによって異なります。

許可ユーザー・ライセンス

IBM Rational 許可ユーザー・ライセンスは、1 人の個人に対して Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、製品を使用する個々のユーザーごとに、任意の方法で許可ユーザー・ライセンスを入手します。許可ユーザー・ライセンスを再割り当てするには、最初に割り当てられたユーザーを、購入者が長期間にわたってまたは永続的に置き換える必要があります。

例えば、許可ユーザー・ライセンスを 1 つ購入した場合、そのライセンスをある個人に割り当てることができます。割り当てられた個人は、Rational ソフトウェア製品を使用することができます。許可ユーザー・ライセンスでは、いかなる場合も (ライセンス交付を受けた個人が製品を使用中でない場合でも) その製品を使用する権利を他者に与えることはありません。

許可ユーザー・ライセンスをインストールするには、56 ページの『プロダクト・アクティベーション・キットのインポート』を参照してください。

許可ユーザー期限付使用权

IBM Rational 許可ユーザー期限付使用权 (FTL) は、1 人の個人に対して特定期間 Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、製品を使用する個々のユーザーごとに、任意の方法で許可ユーザー FTL を入手します。許可ユーザー FTL を再割り当てするには、最初に割り当てられたユーザーを、購入者が長期間にわたってまたは永続的に置き換える必要があります。

注: パスポート・アドバンテージ・エクスプレス・プログラムで許可ユーザー FTL を購入した場合、ライセンス満了前に購入者が IBM に延長を希望しないことを通知しない限り、IBM は現行価格でライセンス期間をさらに 1 年間自動的に延長します。継続 FTL 期間は、最初の FTL 期間の満了時から開始します。この継続 FTL の価格は、現在、最初の FTL 価格の 80 パーセントですが、変更される可能性があります。

ライセンス期間を延長する意思がないことを IBM に通知した場合は、ライセンス満了時に製品の使用を中止しなければなりません。

許可ユーザー期限付使用权をインストールするには、56 ページの『プロダクト・アクティベーション・キットのインポート』を参照してください。

フローティング・ライセンス

IBM Rational フローティング・ライセンスは、単一のソフトウェア製品に対する複数のチーム・メンバーで共用することができます。ただし、同時ユーザーの総数は、購入したフローティング・ライセンスの数を超えてはなりません。例えば、

Rational ソフトウェア製品のフローティング・ライセンスを 1 つ購入した場合、組織内の 1 人のユーザーだけが任意の時期に製品を使用することができます。製品を使用したい他のユーザーは、現行ユーザーがログオフするまで待たなければなりません。

フローティング・ライセンスを使用するには、フローティング・ライセンス・キーを入手して、Rational License Server にインストールします。サーバーは、ライセンス・キーへのアクセスを要求するユーザー要求に応じます。サーバーは、その組織が購入したライセンス数と同じ数の同時ユーザーにアクセスを許可します。

インストール済みパッケージに関するライセンス情報の表示

IBM Installation Manager からインストール済みパッケージのライセンス情報を確認することができます。ライセンス情報には、ライセンス・タイプおよび有効期限が含まれています。

ライセンス情報を表示するには、以下のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。

インストールされているパッケージごとに、パッケージのベンダー、現行ライセンス・タイプ、および有効期限が表示されます。

ライセンスの購入

現行の製品ライセンスの有効期限が切れる場合、またはチーム・メンバー用に追加の製品ライセンスが必要な場合は、新規ライセンスをご購入いただけます。

ライセンスを購入して製品を使用するには、以下のステップを完了してください。

1. 購入するライセンスのタイプを決定します。
2. ibm.com[®] にアクセスするか、IBM 営業担当員に連絡を取り、製品ライセンスを購入します。詳しくは、IBM Web ページのソフトウェアのご注文方法をご覧ください。
3. 購入したライセンス・タイプに応じて、受け取ったライセンス証書を使用し、以下のいずれかを実行して製品を使用可能にします。
 - 製品の許可ユーザー・ライセンスを購入した場合は、パスポート・アドバンテージにアクセスして、そこに記載されている説明に従ってプロダクト・アクティベーション・キットをダウンロードします。アクティベーション・キットをダウンロードした後に、Installation Manager を使用して、プロダクト・アクティベーション用の .jar ファイルをインポートします。
 - 製品のフローティング・ライセンスを購入した場合は、IBM Rational ライセンスおよびダウンロード (IBM Rational Licensing and Download) サイト へのリンクをクリックして、ログインし (IBM への登録が必要です)、次に IBM Rational ライセンス・キー・センター (IBM Rational License Key Center) に接続するためのリンクを選択します。そこで、ライセンス証書を使用して、ご使用のライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを取得できます。

オプションとして、パスポート・アドバンテージにアクセスして、製品のアクティベーション・キットをダウンロードすることができます。アクティベーション・キットをインポートした後に、長い間コンピュータをオフラインで使用する場合は、フローティング・ライセンス・タイプからパーマネント・ライセンス・タイプに切り替えることができます。

この後、アクティベーション・キットをインポートするか、製品のフローティング・ライセンス・サポートを使用可能にする場合は、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用します。

ライセンスの使用可能化

Rational ソフトウェア製品を初めてインストールする場合、または開発シート・ライセンスを延長してこの製品の使用を継続する場合には、ご使用の製品のライセンスを使用可能にするためのオプションがあります。

Rational Software Delivery Platform 製品は、以下の 2 つの方法でライセンスを使用可能にできます。

- プロダクト・アクティベーション・キットをインポートする方法
- Rational Common Licensing を使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーにアクセスする方法

プロダクト・アクティベーション・キットのインポート

パーマネント・ライセンス・キーをインストールするには、IBM Installation Manager を使用してダウンロード・ロケーションまたは製品メディアからアクティベーション・キットをインポートします。

アクティベーション・キットを購入していない場合には、先にアクティベーション・キットをダウンロードします。製品または製品のアクティベーション・キットを購入済みの場合は、該当の CD を挿入するか、アクセス可能なワークステーションに IBM パスポート・アドバンテージからアクティベーション・キットをダウンロードします。アクティベーション・キットは、Java アーカイブ (.jar) ファイルを含む圧縮ファイルです。jar ファイルにはパーマネント・ライセンス・キーが格納され、製品のアクティベーションのためにインポートする必要があります。

アクティベーション・キットの .jar ファイルをインポートして、新しいライセンス・キーを使用可能にするには、次のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。
3. パッケージを選択し、「**アクティベーション・キットのインポート**」ボタンをクリックします。
4. 「**次へ**」をクリックします。 選択したパッケージの詳細 (現行のライセンスの種類、ライセンスが適用される製品のバージョン範囲など) が表示されます。
5. アクティベーション・キットのメディア CD またはダウンロード・ロケーションのパスを参照し、適切な Java アーカイブ (.jar) ファイルを選択して、「**開く**」をクリックします。

6. 「次へ」をクリックします。「要約」ページに、アクティベーション・キットのインストール宛先ディレクトリー、新規ライセンスが適用される製品、およびバージョン情報が表示されます。
7. 「完了」をクリックします。

パーマネント・ライセンス・キーを含むプロダクト・アクティベーション・キットが製品にインポートされます。「ライセンスの管理」ウィザードに、インポートが正常に行われたかどうかが表示されます。

フローティング・ライセンスの使用可能化

ご使用のチーム環境がフローティング・ライセンスの強制をサポートしている場合は、製品に対してフローティング・ライセンスを使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーへのアクセスを取得するようにサーバー接続を構成することができます。

フローティング・ライセンスの強制を使用可能にする前に、管理者からライセンス・サーバー接続情報を入手する必要があります。ライセンス・サーバー、ライセンス・キー、および Rational Common Licensing 管理の詳細については、「*IBM Rational* ライセンス管理ガイド」を参照してください。

注: ワークステーションへのフローティング・ライセンスの適用を可能にすると、プロダクト・アクティベーション・キットに含まれるライセンスが使用不可になります。

「ライセンス管理ガイド」の最新版は、次の Web サイトで入手できます。
http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rc1/701/docs/install_instruction/license_admin.pdf

フローティング・ライセンスを指定のパッケージのライセンス・タイプとして使用可能にし、ライセンス・サーバー接続を構成するには、次のようにします。

1. IBM Installation Manager for the Rational Software Delivery Platform では、「ファイル」→「開く」→「ライセンスの管理」をクリックします。
2. パッケージのバージョンを選択し、「フローティング・ライセンス・サポートの設定」ボタンを選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「フローティング・ライセンスの適用を可能にする」ボタンをクリックします。
5. 1 つ以上のライセンス・サーバー接続を構成します。
 - a. 「サーバー」テーブルの空のフィールドをクリックするか、「追加」ボタンをクリックします。
 - b. 管理者から冗長サーバー環境の情報を入手した場合は、「冗長サーバー」ボタンをクリックします。第 1、第 2、第 3 のサーバー名およびポートのフィールドが表示されます。
 - c. ライセンス・サーバーのホスト名を「名前」フィールドに入力します。
 - d. オプション: ファイアウォールを使用する環境では「ポート」フィールドに値を入力します。管理者から指示が無い限り、このポートには値を割り当てないでください。

- e. 冗長サーバー環境では、(必要に応じて) 第 2、第 3 のサーバーの名前とポートを入力します。
 - f. オプション: 「**接続のテスト**」ボタンをクリックして、接続情報が正しいことと、サーバーが使用可能であることを確認できます。
 - g. 「**OK**」をクリックします。
6. 「**次へ**」をクリックします。
 7. オプション: 共用するシェルまたはカスタム・パッケージのライセンス使用順序を構成します。リスト内のライセンスの順序によって、ご使用のパッケージが特定ライセンス・パッケージのライセンス・キーにアクセスする順序を決定します。
 8. 「**完了**」をクリックします。

「ライセンスの管理」ウィザードに、フローティング・ライセンスの構成が正常に行われたかどうかを示されます。

使用可能にした製品を開くと、ライセンス・サーバーに接続され、使用可能なフローティング・ライセンス・キーのプールからライセンス・キーを入手することができます。

プロトコル・キーおよび仮想テスター・ライセンス・キー・パックの管理

Rational Performance Tester は、パフォーマンス・スケジュールを実行する際に、プロトコル・キーと仮想テスター・ライセンス・キー・パックが正しいかどうかを検査します。

また、プロダクト・アクティベーションに加えて、Rational Performance Tester は、パフォーマンス・スケジュールの実行時に、プロトコル・キーおよび仮想テスター・ライセンス・キー・パックが正しいかどうかを検査します。HTTP 以外のプロトコルでテストを実行するには、プロトコル・キーが必要です。5 人を超える仮想ユーザーでテストを実行するには、仮想テスター・ライセンス・キー・パックが必要です。これらのキーは、フローティング・ライセンスのプロダクト・アクティベーション用に使用するのと同じ Rational License Server からチェックアウトできます。

Windows でプロトコル・キーおよび仮想テスター・ライセンス・キーをチェックアウトするには、IBM Rational License Key Administrator プログラムを使用して、以下のように Rational License Server を指し示す必要があります。

1. 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM Rational」 → 「IBM Rational License Key Administrator」をクリックします。
2. ご使用の Rational License Server の名前を入力します。

IBM Rational License Key Administrator についての詳しい情報は、「ヘルプ」 → 「目次と索引」を選択して参照してください。

Linux バージョンの IBM Rational License Key Administrator はありません。Linux でプロトコル・キーおよび仮想テスター・ライセンス・キーをチェックアウトするには、.flexlmrc ファイルを作成して編集します。5 人を超える仮想テスターを実行する、HTTP 以外のプロトコルを使用する、あるいはフローティング・ライセンスのプロダクト・アクティベーションを使用する各ユーザーのホーム・ディレクトリーに、.flexlmrc ファイルを作成します。.flexlmrc ファイルを編集して、Rational License Server のコンピューター名または IP アドレスが記された行を追加します。例えば、このファイルに次のいずれかの行を追加します。

```
RATIONAL_LICENSE_FILE=@license-server-name.com または  
RATIONAL_LICENSE_FILE=@license-server-ip-address
```

Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす

重要: 最適な結果を得るためには、Rational 製品を使用して作業する前に、Rational Performance Tester で使用できるファイル・ハンドルの数を増やしてください。この製品は、プロセス当たりのデフォルトの上限である 1024 個よりも多くのハンドルを使用するためです。(この変更はシステム管理者が行う必要があります。)

以下のステップに従って Linux でファイル記述子を増やす際には、慎重に実行してください。指示に正確に従わなかった場合、コンピューターが正しく始動しなくなる可能性があります。最適な結果を得るためには、システム管理者にこの手順の実行を依頼してください。

ファイル記述子の数を増やすには、以下のようにします。

1. root としてログインします。root のアクセス権限がない場合は、取得してから継続してください。
2. etc ディレクトリーに移動する。
3. vi エディターを使用して etc ディレクトリー内の `initscript` ファイルを編集する。このファイルがない場合は、`vi initscript` と入力して作成してください。

重要: ファイル・ハンドルの数を増やす場合は、コンピューター上に空の `initscript` ファイルを残さないでください。残した場合、次回電源をオンにしたり再始動した場合に、マシンが始動しなくなります。

4. 1 行目に「`ulimit -n 4096`」と入力する (ここで重要なのは、この数値がほとんどの Linux コンピューターでのデフォルト値である 1024 よりもかなり大きな数値である点です)。注意: この数をあまり大きな値に設定しないでください。システム全体のパフォーマンスに重大な影響を及ぼす可能性があります。
5. 2 行目に `eval exec "$@"` と入力する。
6. ステップ 4 と 5 を完了したことを確認した後、ファイルを保存して閉じる。

注: ステップを正しく実行したことを確認してください。正しく実行しないと、マシンがブートしなくなります。

7. オプション: `etc/security` ディレクトリーにある `limits.conf` ファイルを変更してユーザーまたはグループを制限します。SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 9 と Red Hat Enterprise Linux バージョン 4.0 の両方で、このファイルがデフォルトで用意されています。このファイルがない場合は、ステップ 4 でもっと小さい数 (例えば 2048) を指定することを検討してください。このようにして、プロセスごとに開くことのできるファイル数について、ほとんどのユーザーに比較的低い上限を割り当てるようにする必要があります。ステップ 4 で比較的低い数字を使用した場合は、小さい数を指定することはそれほど重要ではありません。ただし、ステップ 4 で大きい数を設定した場合は、`limits.conf` ファイルで上限を設定しなければ、コンピューターのパフォーマンスに重大な影響を及ぼす可能性があります。

すべてのユーザーを制限してから、後で異なる上限を設定する `limits.conf` ファイルの例を以下に示します。このサンプルでは、前述のステップ 4 で記述子を 8192 に設定したことを想定しています。

```
*      soft nfile 1024
*      hard nfile 2048
root   soft nfile 4096
root   hard nfile 8192
user1  soft nfile 2048
user1  hard nfile 2048
```

上記サンプルの * は、最初にすべてのユーザーの上限を設定するために使用されています。その上限は、その後の上限よりも低くなっています。root ユーザーが開くことのできる記述子の数はこれより大きく、user1 はその 2 つの間になります。変更を行う前に、`limits.conf` ファイルに含まれる文書を必ず読んで理解しておいてください。

`ulimit` コマンドについて詳しくは、`ulimit` のマニュアル・ページを参照してください。

Rational Performance Tester の更新

IBM Installation Manager でインストールされたパッケージの更新をインストールできます。パッケージ更新ではインストール済み機能へのフィックスおよび更新が提供され、「パッケージの変更」ウィザードを使用してインストールできる新しい機能が含まれる場合もあります。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。

各インストール済みパッケージには、それぞれのデフォルトの IBM 更新リポジトリのロケーションが組み込まれています。Installation Manager が IBM 更新リポジトリ・ロケーションで、インストール済みパッケージを検索できるようにするには、「リポジトリ」の設定ページで「インストールおよび更新時にサービス・リポジトリを検索する」の設定を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、更新を開始してください。

製品パッケージの更新を検索してインストールするには、次のようにします。

1. Installation Manager の「スタート」ページで、「**パッケージの更新**」をクリックします。
2. システム上で IBM Installation Manager が検出されない場合、または古いバージョンがすでにインストールされている場合は、最新のリリースのインストールを行う必要があります。ウィザードの指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了します。
3. 「パッケージの更新」ウィザードで、更新する Rational Performance Tester 製品パッケージがインストールされているパッケージ・グループのロケーションを選択するか、「**すべて更新**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。Installation Manager は、そのリポジトリ内と、Rational Performance Tester の事前に定義された更新サイトで更新を検索します。進行標識に検索状況が表示されます。
4. パッケージの更新が検出されると、「パッケージの更新」ページの各パッケージの下に「**更新**」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。「**すべてを表示**」をクリックすると、使用可能なパッケージに対して検出されたすべての更新が表示されます。
 - a. 更新の詳細を知りたい場合は、「更新」をクリックし、「**詳細**」の下の説明を検討してください。
 - b. 更新に関する追加情報が入手可能な場合は、説明文の最後に「**詳細情報**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザーに情報が表示されます。更新をインストールする前に、この情報に目を通しておくようにしてください。

5. インストールする更新を選択するか、「**推奨を選択**」をクリックしてデフォルトの選択を復元します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択および選択解除されます。
 6. 「**次へ**」をクリックして続けます。
 7. 「ライセンス」ページで、選択した更新のご使用条件を読みます。「**ライセンス**」ページの左側に、選択した更新のライセンスのリストが表示されます。各項目をクリックすると、ご使用条件の本文が表示されます。
 - a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックします。
 - b. 「**次へ**」をクリックして続けます。
 8. 更新をインストールする前に「要約」ページで選択内容を確認します。
 - a. 前のページ選択した項目を変更したい場合は、「**戻る**」をクリックして変更を行います。
 - b. そのままで問題なければ、「**更新**」をクリックし、更新をダウンロードしてインストールします。進行標識にインストールの完了パーセントが表示されます。
- 注:** 更新プロセス中に、Installation Manager がパッケージの基本バージョンのリポジトリ・ロケーションの入力を求めるプロンプトを表示することがあります。製品を CD またはその他のメディアからインストールした場合は、更新機能を使用するときにそれらのメディアを使用できるようにしておく必要があります。
9. オプション: 更新プロセスが完了すると、プロセスの成功を確認するメッセージがページの上部に表示されます。「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのログ・ファイルを開きます。処理を続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 10. 「**完了**」をクリックしてウィザードを閉じます。
 11. オプション: 「**更新**」ウィザードを使用して更新されるのは、既にインストールされている機能だけです。インストールしたい新機能が更新に含まれている場合、「**パッケージの変更**」ウィザードを実行して、機能選択パネルからインストールする新機能を選択します。

インストールの変更

IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードで、インストール済み製品パッケージの言語およびフィーチャーの選択を変更できます。また、「パッケージの変更」ウィザードを使用して、更新パックなどの、パッケージ更新に含まれている可能性のある新しいフィーチャーをインストールすることもできます。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、変更を開始してください。

インストール済み製品パッケージを変更するには、以下のようになります。

1. Installation Manager の「スタート」ページから、「**パッケージの変更**」アイコンをクリックします。
2. 「パッケージの変更」ウィザードで、Rational Performance Tester 製品パッケージのインストール・ロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。
3. 「変更」ページの「言語」の下でパッケージ・グループの言語を選択して、「**次へ**」をクリックします。パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループにインストールされたすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
4. 「フィーチャー (Features)」ページで、インストールまたは除去するパッケージ・フィーチャーを選択します。
 - a. フィーチャーの内容を知りたい場合は、そのフィーチャーをクリックして、「**詳細**」で簡単な説明を確認します。
 - b. フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。フィーチャーをクリックすると、それに依存するフィーチャーとその従属フィーチャーが、「依存関係」ウィンドウに表示されます。パッケージ内のフィーチャーを選択したり除外したりすると、Installation Manager は、他のフィーチャーとの依存関係を自動的に強制し、ダウンロード・サイズおよびインストールに必要なディスク・スペース所要量を更新して表示します。
5. フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックします。
6. インストール・パッケージを変更する前に「要約」ページで選択内容を確認し、次に「**変更**」をクリックします。
7. オプション: 変更プロセスが完了したら、「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして完了ログを確認します。

前のバージョンへの更新の復帰

IBM Installation Manager の「パッケージのロールバック」ウィザードを使用することで、パッケージの更新を削除して前のバージョンに戻すことができます。

ロールバック・プロセスの際、Installation Manager は以前のバージョンのパッケージのファイルにアクセスしなければなりません。デフォルトでは、これらのファイルは新しいパッケージをアップグレードしたときにコンピューターに保管されます。ロールバックのためにローカルに保存されているファイルを削除した場合、またはアップグレードの際に「設定」ページの「**ロールバック用ファイルの保存**」チェック・ボックス（「ファイル」→「設定」→「**ロールバック用ファイル**」）をクリアした場合には、前のバージョンのパッケージのインストールに使用したメディアまたはリポジトリがない限り、そのバージョンにはロールバックできません。

製品パッケージの更新を適用した場合は、ロールバック機能を使用して、更新を除去して前のバージョンの製品に戻すことを、後で決定します。ロールバック機能を使用すると、Installation Manager は更新されたリソースをアンインストールし、前のバージョンからリソースを再インストールします。ロールバックできるのは一度に 1 つのバージョン・レベルのみです。

詳しくは、Installation Manager のオンライン・ヘルプまたはインフォメーション・センターを参照してください。

更新を前のバージョンに戻す場合は、以下の操作を行ってください。

1. 「スタート」ページで、「**パッケージのロールバック**」をクリックします。
2. 「ロールバック」ウィザードで、「**インストール・パッケージ**」リストから、前のバージョンに戻すパッケージを選択します。
3. ウィザードの指示に従います。

Rational Performance Tester のアンインストール

Installation Manager の「アンインストール」パッケージ・オプションを使用すると、1 つのインストール・ロケーションから複数のパッケージをアンインストールできます。すべてのインストール・ロケーションからインストール済みのすべてのパッケージをアンインストールすることもできます。

パッケージをアンインストールするには、製品パッケージをインストールするために使用したのと同じユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

パッケージをアンインストールするには、以下のようにします。

1. Installation Manager を使用してインストールしたプログラムを閉じます。
2. 「スタート」ページで「**パッケージのアンインストール**」をクリックします。
3. 「パッケージのアンインストール」ページで、アンインストールする Rational Performance Tester 製品パッケージを選択します。「**次へ**」をクリックします。
4. 「要約」ページでアンインストールするパッケージのリストを確認してから「**アンインストール**」をクリックします。アンインストールが終了すると、「完了」ページが表示されます。
5. 「完了」をクリックしてウィザードを終了します。

IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアを使用すると、製品パッケージをリポジトリにコピーできます。リポジトリは、HTTP または HTTPS を介して使用可能な Web サーバーに置くことができます。

Packaging Utility ソフトウェアは、Rational Performance Tester に同梱されている、各プラットフォーム (Windows および Linux) 用の Enterprise Deployment CD にあります。Rational Performance Tester パッケージを含まリポジトリを HTTP または HTTPS 上で使用可能な Web サーバーに置く場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Performance Tester 製品パッケージをリポジトリにコピーする必要があります。

このユーティリティーを使用して、以下のタスクを実行します。

- 製品パッケージ用新規リポジトリの生成。
- 新規リポジトリへの製品パッケージのコピー。複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリにコピーできます。したがって、組織内に共通のロケーションを作成し、そこから IBM Installation Manager を使用して製品をインストールできます。
- リポジトリからの製品パッケージの削除。

Packaging Utility の使用法について詳しくは、このツールのオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility のインストール

IBM Packaging Utility を使用して Rational Performance Tester 製品パッケージをコピーするには、事前に Enterprise Deployment CD からこのユーティリティーをインストールしておく必要があります。

次のステップに従って、IBM Packaging Utility ソフトウェアを Enterprise Deployment CD からインストールしてください。

1. 該当するプラットフォーム用の Enterprise Deployment CD にナビゲートして、CD から zip ファイルを取り出します。
2. Packaging Utility ディレクトリに移動し、圧縮ファイル (pu.disk_win32.zip または pu.disk_linux.zip) から Packaging Utility インストール・パッケージを解凍します。
3. Packaging Utility インストーラーの実行可能ファイルを探します。
 - Windows 用: pu.disk_win32.zip ファイルの解凍が実行された場所にある InstallerImage_win32 ディレクトリに移動します。インストーラーの実行可能ファイル "install.exe" を探します。
 - Linux 用: pu.disk_linux.zip ファイルの解凍が実行された場所にある InstallerImage_linux ディレクトリに移動します。インストーラーの実行可能ファイル "install" を探します。

4. インストーラーの実行可能ファイルを開始し、ウィザードの指示に従って Packaging Utility をインストールします。

Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー

HTTP または HTTPS サーバー上にリポジトリを作成する場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Performance Tester の製品パッケージをコピーする必要があります。

この方法では、Rational Performance Tester インストール・イメージに付属するオプション・ソフトウェアはコピーされないことに注意してください。IBM Installation Manager を使用してインストールされる Rational Performance Tester ファイルのみがコピーされます。

また、Packaging Utility を使用すると、複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリ・ロケーションにまとめることができます。詳しくは、Packaging Utility のオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility を使用して製品パッケージをコピーするには、以下のようにします。

1. CD イメージからコピーする場合は、以下のタスクを実行します。
 - a. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
 - b. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
 - c. システムで自動実行が有効になっている場合は、Rational Performance Tester ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。ランチパッド・プログラムを閉じます。
2. Packaging Utility を開始します。
3. ユーティリティのメインページで、「**パッケージのコピー**」をクリックします。「前提条件」ページが開き、以下の 2 つのオプションが表示されます。
 - **IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**
 - **他のソースから製品パッケージを取得します**
4. 「**IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**」をクリックします。

注: すでにアクセス可能なリポジトリを定義している場合は、「**他のソースから製品パッケージを取得します**」オプションを使用できます。

5. 「**次へ**」をクリックして、「ソース」ページに進みます。選択する製品パッケージがない場合は、製品パッケージが含まれているリポジトリを開く必要があります。
6. リポジトリを開くには、「**リポジトリを開く**」ボタンをクリックします。「リポジトリを開く」ウィンドウが開きます。

注: リポジトリは、ローカル・ファイル・システム内のファイルへのパス、1 枚目の製品 CD が挿入されているディスク・ドライブ、またはサーバー上のファイルの URL です。

7. リポジトリ・ロケーションを定義するには、リポジトリ・ロケーションの「**参照**」ボタンをクリックし、ディスク・イメージが含まれているリポジトリ

ー・ロケーション (共通ルート・ディレクトリー) にナビゲートします。例えば、製品ファイル (disk1、disk2 など) が C:\productA\unzip にある場合、その場所にナビゲートし、repository.config ファイル、diskTag.inf、jar ファイル、または zip ファイルを選択する必要があります。

8. 「OK」をクリックしてリポジトリ・ロケーションを定義し、「リポジトリ・ディレクトリーの参照」ウィンドウを閉じます。
9. 「宛先」ページで、「参照」ボタンをクリックし、製品の保管先として、既存のリポジトリ・ディレクトリーを選択するか、または新規フォルダーを作成します。
10. 選択した製品パッケージおよびフィックス用のリポジトリを指定したら、「OK」をクリックして「ディレクトリーを参照」ウィンドウを閉じます。定義したファイル・パスが、「宛先」ページの「ディレクトリー」フィールドにリストされます。
11. 「次へ」をクリックして、「要約」ページに進みます。「要約」ページには、宛先リポジトリにコピーするように選択された製品パッケージが表示されます。また、このページには、コピーに必要なストレージ・スペースの量およびドライブ上で使用可能なスペースの量も表示されます。
12. 「コピー」をクリックして、選択された製品パッケージを宛先リポジトリにコピーします。ウィザードの下部に、コピー・プロセスにあとどれだけの時間がかかるかを示すステータス・バーが表示されます。コピー・プロセスが終了すると、「完了」ページが開き、正常にコピーされた製品パッケージがすべて表示されます。
13. 「終了」をクリックして、Packaging Utility のメインページに戻ります。

Packaging Utility を使用して Rational Performance Tester インストール・ファイルをリポジトリにコピーしました。これで、Web サーバー上にリポジトリを置いて、ディレクトリーおよびファイルを HTTP で使用できるようになります。(リポジトリは、UNC ドライブにも置くことができます。)

IBM Packaging Utility を使用した作業に関する最新情報については、IBM Packaging Utility のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp>) を参照してください。

オプション・ソフトウェアのインストール

以下のオプション・ソフトウェアが Rational Performance Tester インストール・イメージに組み込まれています。

- IBM Rational Agent Controller バージョン 7.0.1
- IBM Rational ClearCase® LT バージョン 7.0.1

Agent Controller のインストール

Agent Controller は、クライアント・アプリケーションによるローカル・アプリケーションまたはリモート・アプリケーションの起動および管理を可能にしたり、実行中のアプリケーションに関する情報を他のアプリケーションに提供できるようにするデーモンです。次のツールを使用するためには、事前に Agent Controller を別にインストールしておく必要があります。

- アプリケーションのプロファイルを作成するプロファイル作成ツール。プロファイルを作成するアプリケーションと同じシステム上に、Agent Controller がインストールされている必要があります。
- リモート・ログ・ファイルをインポートするためのロギング・ツール。Agent Controller が、ログ・ファイルのインポート元のリモート・システムにインストール済みで、なおかつ実行中である必要があります。
- テスト・ケースを実行するためのコンポーネント・テスト・ツール。Agent Controller が、テスト・ケースを実行するシステム上にインストールされている必要があります。
- WebSphere Application Server バージョン 5.0 または 5.1 でのリモート・アプリケーションのテスト用ツール。(Agent Controller は、アプリケーションのリモート公開、またはローカル・アプリケーション公開またはテストのためにインストールする必要はありません)。WebSphere Application Server バージョン 6.0 にはこの機能が組み込まれているため、Agent Controller はバージョン 6.0 のターゲット・サーバーでは必要ない点に注意してください。

注:

- Agent Controller は、ファイアウォールの後ろにインストールすることを強くお勧めします。
- Agent Controller の使用に伴うセキュリティの詳細については、Agent Controller の資料を参照してください。
- Agent Controller のオンライン資料は、ソフトウェアがインストールされるまでインストールされません。その時点で、資料はオンライン・ヘルプに追加されます。
- Agent Controller バージョン 7.0.1 をインストールする前に、下記の説明に従って Agent Controller の旧バージョンをアンインストールする必要があります。

Agent Controller のサイレント・インストールについて詳しくは、下記の説明を参照してください。

ハードウェア前提条件

注: Rational Performance Tester では、Installation Manager を使用して Agent Controller を Windows および Linux システムにインストールする必要があります。

- AIX: PowerPC® 604e 233MHz (IBM RS/6000® 7043 43P Series) 以上。
- z/OS、LINUX/S39: zSeries® (オペレーティング・システムにより必要)
- 512 MB RAM 以上 (768 MB RAM 推奨)
- ディスク・スペース:
 - インストールのために最小 100 MB のディスク・スペースが必要になります。
- ディスプレイ解像度:
 - 800 x 600 ディスプレイ以上 (1024 x 768 推奨)

サポートされるプラットフォーム

Agent Controller v7.0.1 は、以下のプラットフォームでサポートされています。

- AIX v5.2、 v5.3、 5L on PowerPC (32 ビット)
- z/OS V1R4、 V1R5、 V1R6、 V1R7 on zSeries (32 ビットのみ)

サポートされる JVM

IBM Java SDK v5:

- AIX: J2RE 1.5.0 <http://www-128.ibm.com/developerworks/java/jdk/aix/service.html>
- z/OS: J2RE 1.5.0 <http://www-03.ibm.com/servers/eserver/zseries/software/java/j5pcont31.html>

インストール・ファイルの探索

インストール・ファイルは、以下のディレクトリーの Agent Controller ディスクにあります。

- AIX の場合: <Agent Controller CD>/aix_powerpc
- z/OS の場合: <Agent Controller CD>/os390

AIX ワークステーションへの Agent Controller のインストール

注: Rational Performance Tester では、Installation Manager を使用して Agent Controller を Windows および Linux システムにインストールする必要があります。

Agent Controller の旧バージョンのアンインストール

注: Agent Controller バージョン 7.0.1 をインストールする前に、前のバージョンの Agent Controller をアンインストールする必要があります。

- Agent Controller 7.0 または 6.x が検出された場合、Agent Controller v7.0.1 インストーラーは「既存の IBM Rational Agent Controller を除去し、インストールを再実行してください。」という警告を出してインスト

ールをブロックします。サイレント・インストーラーを使用した場合、Agent Controller v7.0.1 インストーラーは警告を出さずにインストールを終了します。

- Agent Controller v7.0.1 が既にインストールされている場合、インストーラーは「この製品はすでに <rac_install_dir> にインストール済みです。」という警告を出します。既存のインストールを上書きする場合は、「次へ」をクリックします。インストールの継続を選択すると、インストーラーは既存のインストールを上書きします。サイレント・インストーラーを使用した場合には、警告が出されることなく既存のインストールが上書きされます。

AIX プラットフォームから Agent Controller V6.x または V7.x をアンインストールする場合は、残っているファイルを手動で削除する必要があります。具体的には、Agent Controller を停止してアンインストールしてから、アンインストール後に残されている可能性のある以下のファイルをすべてクリーンアップします。

AIX:

```
$RASERVER_HOME/* (Agent Controller がインストールされているディレクトリー)
/usr/lib/libLogAgent.so
/usr/lib/libhcbnd.so
/usr/lib/libhcclco.so
/usr/lib/libhccltdt.so
/usr/lib/libhcclls.so
/usr/lib/libhcclserc.so
/usr/lib/libhcclsert.so
/usr/lib/libhcclsm.so
/usr/lib/libhcbnd.so
/usr/lib/libhclaunch.so
/usr/lib/libhcthread.so
```

オペレーティング・システム環境の構成

次のコマンドを実行して、必要な環境変数を設定してください。

```
PATH={path to java installation}/jre/bin:$PATH
export PATH
LIBPATH={path to java installation}/jre/bin: {path to java installation}/jre/bin/
classic:$LIBPATH
export LIBPATH
```

注: 環境変数の設定を完了すると、コマンド「java -fullversion」を使用して Java のバージョンを確認することができます。

Agent Controller のインストール

1. 管理者 (または root) としてログインする。
2. 適切なプラットフォームのインストール・ファイルを unzip したディレクトリーに移動する。
3. インストールを続行する前に、すべての Eclipse プラットフォームを閉じる。
4. **setup.bin** を実行する。
5. 初期画面で「次へ」をクリックして先へ進む。
6. ご使用条件を読む。

7. 「使用条件の条項に同意します」を選択し、「次へ」をクリックして先へ進む。
8. Agent Controller をインストールするパスを指定し、「次へ」をクリックして先に進む。
9. Agent Controller が使用する Java ランタイム環境 (JRE) 実行可能プログラム java.exe または java のパスを指定する。Agent Controller は、ここに入力された JRE を使用して、Java アプリケーションを起動します。従って、インストーラー・プログラムによって事前入力された JRE パスを変更することができます。

注: この時点で入力した JRE は、Agent Controller の実行にも、Agent Controller による Java アプリケーションの起動にも使用されます。ただし後で、これらの各機能について別々の JRE を使用するように Agent Controller を構成することができます。詳しくは、Agent Controller のヘルプ・トピック『Agent Controller で起動するようにアプリケーションを構成 (Configuring Applications to be launched by Agent Controller)』を参照してください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

10. オプション: 上記のステップ 9 で「WebSphere Application Server のリモート・サポート」を選択した場合は、IBM WebSphere Application Server のバージョンを指定する。「次へ」をクリックして先に進みます。
11. オプション: 上記のステップ 9 で「WebSphere Application Server のリモート・サポート」が選択された場合は、IBM WebSphere Application Server のバージョン 5.0 (Windows のみ) および 5.1 のパスを指定する。「次へ」をクリックして先に進みます。
12. Agent Controller にアクセスできるホストを指定する。Rational Performance Tester では、「特定のコンピューター」を選択する必要があります。「次へ」をクリックして先に進みます。
13. セキュリティの設定でデフォルト値 (「使用不可にする」) を受け入れる。「次へ」をクリックして先に進みます。
14. 要約画面で「次へ」をクリックして、Agent Controller をインストールする。
15. インストールが完了したら、「完了」をクリックする。

Agent Controller のサイレント・インストール

setup コマンドと共に以下のパラメーターを使用して、サイレント・モードでインストール・プロセスを実行することができます。

パラメーター	説明
-silent この変数は、サイレント・モードを使用する場合には必須です。 -V licenseAccepted=true	オプション: インストーラーにサイレントで実行するよう指示します。指定しない場合は、渡された入力内容を使用してインストール・ウィザードを表示します。

パラメーター	説明
-P installLocation	<p>オプション: インストール・パスを指定します。デフォルトのインストール・パスは、「\$D(install)/IBM/AgentController」です。</p> <p>例:</p> <p>Windows: C:\Program Files\IBM\AgentController</p> <p>UNIX/Linux: /opt/IBM/AgentController</p>
-V VJavaPath	<p>必須: Java 実行可能ファイルの完全修飾パスを指定します。</p>
-V VAccessLocal -V VAccessCustom -V VAccessAll	<p>オプション: クライアントによる Agent Controller への接続方法を指定します (ALL、LOCAL、CUSTOM)。変数のうち 1 つだけを「true」に設定し、その他は「false」に設定します。デフォルトは、VAccessAll="true" です。</p> <ul style="list-style-type: none"> 任意のコンピューター: VAccessAll="true" : 任意のクライアントを許可 このコンピューターのみ: VAccessLocal="true" : ローカル・ホストのみに許可 (default) 特定のコンピューター: VAccessCustom="true" : リストされたクライアントを許可 (-V VHosts パラメーターも必要)
-V VHosts	<p>必須: VAccessCustom="true" の場合</p> <p>コンマで区切ってクライアント・ホスト名を指定します</p>
以下の 2 つの変数を両方とも指定し、一方を「true」、他方を「false」に設定する必要があります。 -V VSecurity="true" or "false" -V VSecurityDisable="false" or "true"	<p>オプション: (true、false)</p> <p>デフォルト: VSecurity=true VSecurityDisable=false</p>
-V VUsers	<p>必須: VSecurity="true" の場合</p> <p>Agent Controller に接続できるユーザーを指定します</p>
-V VWAS6 -V VWAS5	<p>オプション:</p> <p>-V VWAS6="true" (デフォルト): WAS V6 を使用している場合</p> <p>-V VWAS5="true": WAS V5.x を使用している場合</p>
-V VWAS_HOME_V50 -V VWAS_HOME_V51	<p>オプション: -V VWAS5="true" の場合</p> <p>IBM WebSphere Application Server 5.1 および 5.0 のインストール・ロケーションを指定します</p>

例:

コマンド行からのインストール:

```
-P installLocation="D:¥IBM¥AgentController"
-V VJavaPath=" D:¥jdk1.4.2¥jre¥bin¥java.exe "
-V VAccessLocal="false"
-V VAccessCustom="true"
-V VAccessAll="false"
-V VHosts="host1,host2"
-V VSecurity="true"
-V VSecurityDisable="false"
-V VUsers="user1,user2"
-V VWAS5="true"
-V VWAS_HOME_V51="D:¥WebSphere5.1¥AppServer"
-V VWAS_HOME_V50="D:¥WebSphere5.0¥AppServer"
```

応答ファイルを使用したインストール:

コマンド行にパラメーターを指定する代わりに、応答ファイル (setup.rsp など) を作成してパラメーターすべてを格納することができます。以下に、Windows の例を示します。Linux/UNIX プラットフォームの場合も同様です。

```
setup.exe -silent -options setup.rsp
```

応答ファイルの内容:

```
# Start of response file
-P installLocation="D:¥IBM¥AgentController"
-V licenseAccepted="true"
-V VJavaPath=" D:¥jdk1.4.2¥jre¥bin¥java.exe "
-V VAccessLocal="false"
-V VAccessCustom="true"
-V VAccessAll="false"
-V VHosts="host1,host2"
-V VSecurity="true"
-V VSecurityDisable="false"
-V VUsers="user1,user2"
-V VWAS5="true"
-V VWAS_HOME_V51="D:¥WebSphere5.1¥AppServer"
```

```
-V VWAS_HOME_V50="D:\WebSphere5.0\AppServer"
```

```
# End of response file
```

Agent Controller の開始と停止

- AIX では、Agent Controller プロセス (RAServer) は自動的に開始しません。ユーザー自身が開始する必要があります。
- **重要:** 特定の JVM では、Agent Controller と適切に連動させるために、LDR_CNTRL 環境変数を USERREGS に設定する必要があります。この変数を設定するには、RAStart.sh スクリプトを実行する前に次のコマンドを実行してください。

```
export LDR_CNTRL=USERREGS
```

- Agent Controller プロセスを開始するには、インストール・ロケーションの **bin** ディレクトリー (例えば、/opt/IBM/AgentController/bin) に移動して、以下を実行します。

```
./RAStart.sh
```

- Agent Controller プロセスを停止するには、インストール・ロケーションの **bin** ディレクトリー (例えば、/opt/IBM/AgentController/bin) に移動して、以下を実行します。

```
./RAStop.sh
```

Agent Controller のアンインストール

1. インストール・ロケーションの **_uninst** ディレクトリー (例えば /opt/IBM/AgentController/_uninst) からプログラム **uninstall.bin** を実行します。
2. 画面の指示に従って、アンインストールを実行します。
3. サイレント・アンインストールを実行するには、コマンド **uninstall.bin -silent** を使用します。

ワークステーション上に複数の参照を持つ Agent Controller のアンインストール

Agent Controller バージョン 7.0.1 では、この製品の複数のインスタンスが 1 つのワークステーション上にインストールされないようになっています。追加のインストールが実行された場合は、スタンドアロン・インストールによるものであっても、製品内の組み込みインストールとしてであっても、Agent Controller は新規インストールを開始しようとする製品の名前の参照を記録します。

スタンドアロン・インストールによるものであっても、製品内の組み込みインストールとしてであっても、Agent Controller が複数回インストールされた (参照回数が複数である) 場合は、最後の参照元である製品がアンインストールされてはじめて、Agent Controller をアンインストールできます。最後の参照元の製品が、まだ Agent Controller を必要とするためです。

別の製品によって必要とされている場合に、Agent Controller のアンインストールを試みても、アンインストールは行われず、「この製品は他の製品から必要とされているため、アンインストールできません」というメッセージが出されます。

z/OS (OS/390®) への Agent Controller のインストール

Agent Controller の旧バージョンのアンインストール

Agent Controller の旧バージョンがある場合は、それを停止し、アンインストールしてからこのバージョンをインストールしてください。

オペレーティング・システム環境の構成

1. RAC のインストール・ディレクトリを作成する。例えば、mkdir /u/rpt/IBM/RAC を実行します。
2. ASSIZEMAX=2147483647 を設定する。システム・プログラマーのサポートが必要になることがあります。
3. RAC を始動するために使用するユーザー ID の .profile に次の export コマンドを追加する。

```
export RASERVER_HOME={install location}
export LIBPATH=$LIBPATH:{install location}/lib:{path to java installation}/bin:
{path to java installation}/bin/classic
export PATH=$PATH:{install location}/bin:{path to java installation}/bin
export _BPX_SHAREAS="NO"
```

注: 環境変数の設定を完了すると、コマンド「java -fullversion」を使用して Java のバージョンを確認することができます。

Agent Controller のインストール

1. UNIX システム・サービス・シェルで、Agent Controller をインストールしたいディレクトリに移動します。/usr/lpp/ ディレクトリにインストールすることをお勧めします。
2. インストール・イメージ **ibmrac.os390.pax** と **tptpdc.os390.pax** をインストール・ディレクトリに転送します。
3. Agent Controller ファイルを抽出するために、次のコマンドを実行します。

```
pax -ppx -rvf ibmrac.os390.pax
```

4. 次のコマンドを実行して、テストおよびパフォーマンス・ツール (TPTP) の Agent Controller ファイルを抽出します。

```
pax -ppx -rvf tptpdc.os390.pax
```

5. UNIX システム・サービス・シェルで以下のコマンドを発行して、Agent Controller 共用オブジェクト・ファイルをプログラム制御にします。

```
extattr +p /usr/lpp/IBM/AgentController/lib/*.so
```

各国語パックをインストールする場合は、以下のステップ 7 からステップ 8 まですて実行してください。インストールしない場合は、ステップ 9 に進みます。

6. NL インストール・イメージ **tptpdc.nl1.os390.pax**、**tptpdc.nl2.os390.pax**、**ibmrac.os390.nl1.pax**、**ibmrac.os390.nl2.pax** をインストール・ディレクトリに転送します。
7. Agent Controller ファイルを抽出するために、次のコマンドを実行します。

```
pax -ppx -rf tptpdc.nl1.os390.pax
pax -ppx -rf tptpdc.nl2.os390.pax
pax -ppx -rf ibmrac.os390.nl1.pax
pax -ppx -rf ibmrac.os390.nl2.pax
```

8. Agent Controller をインストールしたら、インストール・ロケーションの bin ディレクトリー /usr/lpp/IBM/AgentController/bin にディレクトリーを変更し、次を入力してセットアップ・スクリプトを実行します。

```
./SetConfig.sh
```

9. 画面上のプロンプトに従って、Agent Controller を構成します。

z/OS (OS/390) での Agent Controller の開始および停止

注: RAServer では、libjvm.so などの実行可能ライブラリーを含む JRE のディレクトリーを LIBPATH 環境変数に追加する必要があります。例えば、IBM JRE 1.4.1 を使用している場合、LIBPATH 変数は次のように設定されます。

```
export LIBPATH=/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin/classic:  
/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin:$LIBPATH
```

- root としてログインし、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーを開き、以下のコマンドを発行してサーバーを開始します。

```
./RASStart.sh
```

- サーバーを停止するには、root としてログインし、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーを開き、以下のコマンドを発行します。

```
./RASStop.sh
```

z/OS (OS/390) での Agent Controller のアンインストール

- Agent Controller をインストールするときに createLinks.sh を実行した場合は、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーに移動して、以下のコマンドを発行します。

```
./removeLinks.sh
```

- 以下のコマンドを実行して、IBMRAC ディレクトリーとそのサブディレクトリーすべてを除去します。

```
rm -rf /usr/lpp/IBM/AgentController
```

Agent Controller セキュリティー機能の使用

以下のリストには、すべてのプラットフォームで Agent Controller のセキュリティー機能を使用するためのヒントが含まれています。

- オペレーティング・システムによって認証が付与されます。インストール時に指定されたユーザーのみが認証を許可されます。ユーザー名として ANY が指定されると、有効なユーザー名とパスワードのペアは、すべて認証のためにオペレーティング・システムに送られます。それ以外の場合は、リストされたペアのみが送られます。
- セキュリティーが使用可能になっている場合、インストール時に指定されたユーザーは、Agent Controller との情報を交換を行う前に、オペレーティング・システムの認証を受ける必要があります。ワークベンチのユーザーは、オペレーティング・システムのユーザー名とパスワードである、有効なユーザー名およびパスワードの組み合わせを提供する必要があります。
- (Windows のみ) ドメイン・ネームのパスワードは認証されません。ローカル・ユーザー名とパスワードのペアを指定する必要があります。
- 鍵管理機能は提供されません。Agent Controller は、セキュリティーのために Java 鍵ストアを使用します。

- デフォルトの鍵ストアとエクスポート済み証明書は、Windowsでは Agent Controller ディレクトリーの <rac_install_dir>\security にあり、Linux では <rac_install_dir>/security にあります。ここで、<rac_install_dir> は Agent Controller のインストール・ディレクトリーです。これらは例として示されています。意味のある証明書を含む鍵ストアで置き換える必要があります。

ワークベンチおよび Agent Controller 間の互換性についての要約

後方互換性 (バージョン 6.0.1 Agent Controller を使用して古いワークベンチを使用) : 互換性があります。新しい Agent Controller は、前のバージョンの機能をすべてサポートします (例: 制御チャネルのセキュリティ)。ただし、多重方式などの新機能は使用できません (安全を確保するために制御チャネルを介してデータを戻します)。

前方互換性 (古い Agent Controller を使用した 6.0.1 ワークベンチの使用) : 一般的に、互換性がなく、サポートされていません。

バージョンの異なる Agent Controller 間の互換性: 一部の製品またはツール (IBM Performance Optimization Toolkit など) では、複数のホスト上の Agent Controller (ワークベンチは別にして) が互いに検出し合い、通信する必要があります。この機能について言えば、あるバージョンから次のバージョンに変更するということは、この機能を使用する必要がある場合は、すべての関連ホスト上で Agent Controller バージョン 6.0.0.1 または Agent Controller バージョン 6.0.1 のいずれかを使用する必要があることを意味します。つまり、Agent Controller インスタンス間で動的ディスカバリーを使用する場合は、異なるバージョンを組み合わせることはできません。

既知の問題と制限事項

このセクションでは、Agent Controller のインストールおよびアンインストールに関する既知の問題と制限について説明します。特に記載がなければ、以下の情報は Agent Controller をサポートするすべてのオペレーティング・システムに適用されます。

Agent Controller は Windows 以外のプラットフォームで始動に失敗することがあります

Agent Controller は Windows 以外のプラットフォームで始動に失敗し、以下のメッセージが表示されることがあります。

RAServer failed to start. (RAServer が始動に失敗しました)

この障害は通常、TCP/IP ポート 10002 が空いていないために起こります。Agent Controller はデフォルトでこのポートを listen します。Agent Controller が開始されたときにシステム上で別のプロセスがこのポートを使用しているか、または Agent Controller が停止され、その後再始動されたばかりで、ポートがまだ解放されていないことが考えられます。

Agent Controller が開始に失敗した場合は、以下の方法で開始することができます。

- ポート 10002 が他のプロセスによって使用中である場合は、serviceconfig.xml ファイルを編集してポート番号を変更できます。これについては、ドキュメンテーションに説明があります。

注: serviceconfig.xml ファイルに構成されている通信ポート番号が変更された場合、WebSphere Application Server 構成に定義されているプロパティ `INSTANCE_RAC_PORT_NUM_ID` を同じポート番号に変更する必要があります。

- Agent Controller が停止したばかりの場合は、数分待って再始動してください。

その他のインストールおよびアンインストール中のエラー

インストールまたはアンインストール中にエラーを検出する場合は、実行中のプロセスによって Agent Controller のオブジェクト・ファイルがロードされるためだと考えられます。オブジェクト・ファイルが確実に変更されるように、以下の操作を行ってください。

1. Eclipse ワークベンチをシャットダウンします。
2. Java Profiling Agent または J2EE Request Profiler のいずれかを含む、すべての `java.exe` プロセスを終了します。

ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・チーム向けの構成管理ツールです。ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・ワークグループから、分散されたグローバル企業まで対応する、IBM Rational ClearCase 製品ファミリーの一部です。

インストール・メディアには、Rational ClearCase LT バージョン 7.0.1 が入っており、Rational Performance Tester とは別にインストールされます。

ClearCase LT が既にワークステーションにインストールされている場合は、それを現行バージョンにアップグレードできます。旧バージョンからのアップグレードについては、ClearCase LT のインストール文書を参照してください。

Rational Performance Tester と ClearCase LT を連携させて作業できるようにするには、Rational ClearCase SCM アダプター・フィーチャーをインストールする必要があります。デフォルトでは、このフィーチャーは Rational Performance Tester をインストールする際に選択されていますが、これを組み込まなかったとしても、IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードを使用して、後でインストールできます。詳しくは、65 ページの『インストールの変更』を参照してください。

Rational ClearCase SCM アダプターは、有効にしてからでなければ使用できません。アダプターを有効にして使用方法については、オンライン・ヘルプを参照してください。

ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報の探索

Rational ClearCase LT をインストールする場合の詳細な説明については、ClearCase LT インストール・メディアに添付されているインストール文書を参照してください。また、製品のインストール前に、ClearCase LT リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

一部の文書は、Acrobat® PDF ファイルになっています。ファイルを開くには、Adobe Reader ソフトウェアが必要です。これは、<http://www.adobe.com/products/acrobat/readstep2.html> からダウンロードできます。

Windows 用: インストールの説明およびリリース情報は、ClearCase LT インストール・ランチパッドから表示できます。『Rational ClearCase LT のインストールの開始』を参照してください。

インストールの説明を開くには、次のようにします。

- Windows 用: 1 枚目の ClearCase LT インストール CD (または電子イメージのディスク・ディレクトリー) から、doc¥books¥install.pdf を開きます。
- Linux 用: <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=pub1gi11636600> を参照して、ダウンロードします。

IBM Publications Center からの文書の取得

Rational ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報は、IBM Publications Center からダウンロードすることもできます。

1. <http://www.ibm.com/shop/publications/order> にアクセスします。
2. Publications Center の「Welcome」ページで、国/地域を選択します。
3. 「マニュアル検索」をクリックします。
4. 該当する検索フィールドに、文書タイトルまたは資料番号を入力します。
 - 文書をタイトルで検索するには、「キーワード」フィールドにタイトルを入力します。
 - 文書を資料番号 (資料 ID) で検索するには、「資料番号」フィールドに番号を入力します。

表 2. ClearCase の資料番号

文書	資料番号
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite®、ClearCase LT Windows インストールおよびアップグレードガイド	GI88-8709-00
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite、ClearCase LT インストールおよびアップグレードガイド (UNIX)	GI88-8710-00
IBM Rational ClearCase LT リリース ノート	GI88-8713-01

Rational ClearCase LT のインストールの開始

このセクションでは、Rational ClearCase LT のインストール・プロセスの開始について説明します。製品をインストールする場合は、「Rational ClearCase LT Installation Guide」に記載の詳細なインストール説明を参照してください。インストールの前に、リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

Windows への Rational ClearCase LT のインストールの開始

1. 次のいずれかの方法を使用して、Rational ClearCase LT ランチパッド・プログラムを開始します。
 - Rational Performance Tester ランチパッド・プログラム (29 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) から、「**Rational ClearCase LT**」をクリックします。

- Rational ClearCase LT の 1 枚目の CD を挿入します。ランチパッド・プログラムが自動的に始動します。プログラムが実行されない場合は、その CD またはディスク・イメージのルートから、`setup.exe` を実行してください。
2. リリース情報をまだ読んでいない場合は、一読します。
 3. 「**IBM Rational ClearCase LT のインストール**」をクリックします。Rational ClearCase LT セットアップ・ウィザードが開きます。

セットアップ・ウィザードの指示に従って、インストールを完了します。

Linux への Rational ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT バージョン 7.0 を Linux ワークステーションにインストールする場合の詳細な説明は、「*IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation Guide, 7.0, Linux and UNIX*」にあります。この文書は、600 からダウンロードできます。

Rational ClearCase LT ライセンスの構成

Rational Performance Tester が Rational ClearCase LT と同じコンピューターにインストールされている場合は、Rational ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要はありません。しかし、Rational ClearCase LT を Rational Performance Tester なしでインストールする場合は、ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要があります。

ライセンスの構成について詳しくは、ClearCase LT のインストール・ガイド を参照してください。

特記事項

© Copyright IBM Corporation 2000, 2008. All rights reserved.

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

Intellectual Property Dept. for Rational Software
IBM Corporation
20 Maguire Road
Lexington, Massachusetts 02421-3112
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用する事ができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

www.ibm.com/legal/copytrade.shtml を参照してください。



Printed in Japan

GI88-4076-03



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12